
魔法少女リリカルなのは 混沌の獣

獣の数字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 混沌の獣

【Nコード】

N2794I

【作者名】

獣の数字

【あらすじ】

混沌の獣に喰われた少女が目覚めるとそこは……

月姫とリリカルなのはのクロス

月姫の世界の人間がなのはの世界に行きます。主人公は一応オリエントではありません。でも、オリ設定は入るかも。
処女作。

プロローグ（前書き）

主人公は山瀬舞子。

プロローグ

ひどく冷たく、禍々しい目。

青く光る死神の目を持つ彼のナイフがボクの胸に突き立てられた。

そして

心の奥底まで染み込むような冷たい感覚。

「あつ……」

突き刺さったと感じた瞬間、ボクが消えていくのが分かった。

その瞬間、

ドクッ

ドクッ

ドクッ

ドクッ

ドクッ

中の獣達が暴れ出ていくのが分かる。

でも、彼が獣達を次々と殺していくのが見えた。

ああ。彼なら、大丈夫だろう。

そう思い、闇に消え行くにまかせた。

「おねえちゃん」

聞き慣れた、血を分けた女性の声。

消え去りそうな視界の端で、飢えた何匹かの獣達が声のあった方に走り出す。

闇に溶け込みかけた、ボクの意識が急速に戻ってくる。

「アアアアアアア！」

崩れかけた体を無理やり動かし、明美に襲いかかった獣の腕を引っ張る。

その瞬間

彼のナイフが私ごと切り裂いた。

私はそのまま地面に倒れた。

顔に水が落ちてくるのが分かった。

「おねえちゃん……おねえちゃん……。。。」

明美が私の体を抱いて、涙を流していた。

「あ、あけみ……わらって……。」

「あけみ、わらって。ボクのぶんもわらって。…さいごにえがおをみせて……。」

「ああ…おねえちゃん…。うん…笑うよ。わ、わたし、笑って、笑ってるよ。」

世界が暗い。全てが遠くなる…。

その時わたしは何かにも包まれるように落ちていった。

《sideはやて》

ドサッ

そんな音が聞こえたのはいつものように一人で夕食を作っている最中だった。

「何やるか？」

そう思い、庭に出てみると一人の真っ黒なコートを着た女の子が倒れていた。

「ちよつ、大丈夫なん？」

私は慌て近くまでいった。

「良かった。怪我はないようやな。でも、何でこんな所に倒れるんやろ？」

私はそう思ったけども、わかるはずもなく、

「とりあえず、石田先生に来てもらおう」

そう思い、石田先生に電話した。

一話 目覚めの刻（前書き）

一章は無印の前まで。

つまり、原作が始まる前です。

一話 目覚めの刻

sideはやて

昨日、庭に倒れていた女の子を石田先生と一緒に病院に連れていった。先生が言うには何も問題はならしい。今日は私の検査の後にも見にいってみようと思う。

「でも、あないな変なかつこうして何でわたしの庭に倒れとったんやるか？」

しばし考えてみるも、分かるはずもなく、

「まあ、世の中には説明できん不思議なこともようけえあるわな。」
と、自分の足に触れながらそう呟いた。

8

今日の検査も終わり、彼女の病室に来てみた。

「うーん、昨日はよう見んかったけど、こつ、あらためてよく見てみると女の子なのにかっこええな。髪形も色もどことなく私と似てるし、お姉ちゃんができたみたいや。」

そう私が呟くとピクツと体を振るわし、彼女はゆっくりと目を開けた。

「目が覚めたん？」

side 舞子

あたりは闇で満ちている

『私』という意志はあろうとも『私』という意思はない
『私』という他者はあるとも『私』という自己はない
『私』という群体はあろうとも『私』という個体はない
私は一にして全
私は全にして一

ここでは全てが『私』でもあり『私』ではない
全ての『私』が混濁し、一つの『私』を形成する
『私』の周りを満たす闇はその全てが『私』である
ゆえに『私』とは天も地も融合した一つの世界であり、ただ『私』
という混沌が『在ル』のみである

『私』はこの世界をただただ漂う
動くことも考えることなく、ただそこに『在ル』

「
」

何かが聞こえる。

『私』しかないこの世界で

「
お姉ちゃん
」

……あけ……み

『私』という意識が急速に作られる

『私』という自己が形成される

この混沌が『私』というカラで覆われる

『私』は声のする方へ手を伸ばそうとし、

「目が覚めたん？」

見知らぬ少女が目の前にいた。

sideはやて

「目が覚めたん？」

私がそうたずねても彼女はまだぼうつとした表情で

「…ここ…は…」

と言った。

「ここは病院や。わたしの庭で倒れとったんやで。」

「…病院…」

彼女はまだ意識がはっきりしていないのか、よくわかっていなさそうな声で呟いた。

「なあ、あんさんの名前は何ていうん？わたしの名前は八神はやてっていうんや」

「……名前……」

彼女はそう呟くと思い出すように言った。

「……舞子……山瀬……舞子……」

side 舞子

目が覚めると目の前に見知らぬ女の子がいた。私がぼうつとしていて、彼女……いや、八神はやてが私の名前を聞いてきた。

名前……

混沌である私にとって名前とは数多くあるものであり、その全てが本物の名前である。なぜなら、私はネロ・カオスでもあり、遠野志貴でもあり、山瀬舞子でもあるのだから。しかし、今の私の名前を聞かれると、こう答えるしかないであろう。

「……舞子……山瀬……舞子……」

私……いや、ボクがそう答えると八神ちゃんはどこか嬉しそうに

「そっか、舞子ちゃんっていうんやね。わたしのことははやって呼んでな。」

ボクはちよつとだけムツとした。ボクの半分ぐらいの歳の女の子にちゃんづけで呼ばれるのは、なんとなく癪に障さむるのだ。

「ボクのことをちゃんづけで呼ぶのはやめて。ボクの方がずっと歳上なんだから。」

ボクがそう言うとはやてちゃんは「ボクっ娘や！」とか何とか、訳のわからないことを言いながらも笑って答えた。

「歳上ゆうても2、3歳ぐらいしか変わってへんやん。せやから、ちゃんづけで呼んでも問題なしや。」

「……………へ？」

あの、2、3歳でも歳上なんだからちゃんづけで呼んでもいいことにはならない…………いや、そんなことが言いたいのではなくて

「2…2、3歳？」

ボクは啞然としたがはやてちゃんはそんなことお構いなく

「目が覚めたんやから石田先生に連絡してくるわ。」

そう言って出て行ってしまった。

しばらく呆然としてしていると自分の手足が目に入った。

その手足はボクが覚えているものよりも明らかに小さかった。いや、小さすぎた。ふと自分の胸を見てみた。ぺったんこだった。それは

もう洗濯板の見本ともいうぐらい完璧なべったんこだった。

「……………なんでぞ」

ボクはどこかの正義の味方のようにそう呟いた。

二話 家族

side はやて

私が石田先生と一緒に病室に戻ってくると、そこには世の不条理を嘆くように頭をかかえた舞子ちゃんの姿があった。

石田先生があわてて

「どづしたの？どこか痛いの？」

そう尋ねると

「……心が……心が痛いんです。」

舞子ちゃんはそう答えた。

私にはよくわからなかった。石田先生も同じように思ったのか、どう返事をすればいいのか分からずに困っていた。しかし、そこはさすがにお医者さんだけはあって、すぐに気を取り直して舞子ちゃんの診察をしていった。

「……うん。身体には異常はないみたいね。じゃあ、これからあなたの今の状況を話すから聞いていてね。」

そして、石田先生は舞子ちゃんに、ここが海鳴大学病院であること、うちの庭で倒れていてここに運ばれてきたことなどを話した。

「……だいたい今の状況を話したけど理解できたかな？」

「はい。おおよそ理解できました。」

「どうしてあんなところに倒れていたのか、わかるかな？」

「……すみません。私は気が付いたらここで寝ていたので……」

そっか。わたしもそこは気になっていたんやけどな……。て言うか石田先生、あんなところとは失礼な。

「じゃあ、今度はこっちからいくつか質問するから答えてね？」

そう先生が言うと、どこか困ったように舞子ちゃんはうなずいた。

side 舞子

いくつか質問するから答えてね？

そう言われたボクはちょっと困ってしまった。

ボクはなぜ自分が存在しているのかすら全く分からないのだ。むしろわかつていることなど、名前だけである。

そして、もしボクの意識がなくなる前の出来事を言っただとしたら、間違いなく頭のおかしい子供にされて、施設に連れていかれるか、シエルさんのような、教会の代行者がやってくるかのどちらかだろう。やってきたとしても、埋葬機関の人でない限り負けることはな

いだろうが。しかし、なるべく他人に迷惑はかけたくない。だから、ボクが言えることは名前だけである。出来れば名前も偽名を使いたいが、はやてちゃんにもう本名を教えてしまったので言うしかないだろう。幸い、山瀬という名字はそれほど珍しいものではないので、特に問題はないだろう。

「あなたのお名前は？」

うん。これは問題ない。

「山瀬舞子です。」

先生は手に持ったカルテに記入していった。

「自分の家の住所と電話番号は分かる？」

これは困った。ボクのことを話せば、間違いなく親に連絡がいくだろう。そうなれば、ボクが小さくなって生き返ってしまったことがばれてしまうし、何より、ボクがネロだということを知っているあの真祖や弓、そして唯一ボクを殺すことができる、ボクの『死』にボクが生きていることがばれたら問答無用で殺されそうだ。ケモノ達を制御できず、他人を襲ってしまうかもしれない状況ならともかく、ケモノ達を制御できる今となつては会いたくない人？ 達だ。ケモノ達も怯えているし。だから

「もう…家族には絶対に会えないし、帰る家もないんです…」

そう、うつむきながら言った。……嘘は言っていないよ、嘘は。家族に会えないのも、帰る家がないのも本当のことだし。

先生とはやてちゃんはハツとすると、悲しそうな表情になった。

しばらくその暗い雰囲気が続いていると、はやてちゃんが何かを決意したような表情で顔をあげ

「なあ、舞子ちゃん。これから住むところがないんやったら、わたしの家に住まへん?」

「へ?」

「石田先生、舞子ちゃんをわたしの家に住まわしたらあかん?」

「そうね…。二人がそれでいいんだったら別に構わないわよ。」

「よっしゃ。それなら問題あらへんな。これで私達、一緒に住めるな!」

「ちよつ…ちよつと待って!」

クツ…展開が早すぎてついていけない!落ち着け…落ち着けボク…
…よしっ

「ねえ、はやてちゃん。ボクとしてはその申し出は嬉しいんだけど、君のお父さんやお母さんに何も言わないで、勝手に決めるのはダメだと思っんだ。だから、家族でよく話し合ってからもう一度言うてくれるかな?」

(よし。これではしばらく時間は稼げる。その間に、何か言い訳を考えないと。)

そう思っていると、はやてちゃんの顔がうつむき、石田先生もどこ

か困ったような表情をしていた。

あれ？ひょっとして地雷踏んだ？

「わたしには、お父さんやお母さんは居らんのかな。居るのは顔も見ることないグレアム叔父さんだけや。せやから、わたしが家主ってことや。家主のわたしがええ言っとんやから、何も問題あらへんわ。」

そう彼女は最後に笑顔を作って言った。その笑顔はとても痛々しいものだった。

はやてちゃんは一旦、顔をふせてから、ボクの顔色をつかがうように、そろりともう一度顔を上げ

「もう、ずっと独りやったからな。独りに慣れたと言えば慣れたんだよ。でもな、ふとした時に、独りが辛くなったり寂しくなったりする時があるんよ。だから……だから……わたしは家族になつてください。」

はやてちゃんは真剣に、そして、拒絶されるのを恐れるようにそう言った。

ボクは明美とはやてちゃんを重ねて見ていた。どちらも家族に残されていった者。そしてその辛さを心の中に押さえることしかできなかった者。

(明美もはやてちゃんのように苦しんでいたのかなあ……)

そのように思ってしまったと、はやてちゃんに対する返事はもう決まったようなものだった。

ボクはおどけるようにして

「はやてちゃん？それはひよっとしてボクに対するプロポーズかな？」

ボクがそう言うとはやてちゃんは

「……………へ？……………んなあ！！」

と、しばらく意味が分からずきよとんとしていたが、やがて意味を理解したのか、顔を真っ赤にして慌てていた。

ボクはその様子を見ながらニコニコしていると、はやてちゃんはようやくからかわれたことに気が付いたのか、羞恥やら怒りやらでさつきよりも顔を真っ赤にして

「ひ、ひとが真剣に言っとなるのに、何や！その態度は！！！！」

「あはは！…！ごめんごめん。…でも、はやてちゃんに泣き顔は似合わないよ。」

「……………え」

「ボクはね、はやてちゃんは笑顔でいて欲しい。いつも笑っていて欲しい。だから、ボクからもお願いするよ。はやてちゃん、ボクの家族になってください。」

「あっ……」

はやてちゃんは泣きそうになりながら

「ほんまにええの？」

「もちろん。」

「わたしは足が動かへんからいっぱい迷惑かけてしまつて。」

「いいんだよ、迷惑かけても。お互いに助け合つのが家族っていうものでしょ。」

そう言つと、はやてちゃんは涙を流しながらも

「何や。そつちの方がプロポーズみたいやん。」

「そうだね。それじゃあはやてちゃん、プロポーズの返事を聞かせてくれるかな？」

「……ずるいわ。そないなこと言われたら返事なんかもう決まつたようなものやんか。……もちろんOKや!!!」

はやてちゃんがそう言つと、ボクは手を差し出しながら、

「これからよろしくね、“はやて”」

「あつ……うん、これからよろしくな“舞子”」

そう言つてボク達は真正正銘の笑顔で握手をした。その時見た、はやての笑顔は今まで見てきたどの笑顔よりも輝いて見えた。

オマケ

「な、なあ舞子。あ、あんな……」

はやてが手をモジモジしながら、少し頬を赤らめてそう言ってきた。

「どうしたの？はやて。」

ボクがそう言うと、しばらくはやてはその調子でいたが、ようやく決心がついたのか顔をもっと赤くしながら

「あ、あんな……あの……その……舞子のこと……お、お姉ちゃんって呼んでええ？」

「……はい？」

はやては消え入りそうな声でそう言ってきた。ボクは思いもよらない言葉を言われてポカーンとしてしまった。

はやては言い訳をするように

「わ、わたしは一人っ子なんよ。だ、だから、その、兄弟や姉妹に憧れるっていうか、えと………い、いやなら別に今のままでええんよ！」

と、まくし立てた。

ボクはしばらく固まっていたが、意味が分かってくるに連れて、笑みを深くしていき

「もうしょうがないな。はやては。まったく、本当に甘えん坊さんだね。」

「なあ！？い、いや、別にわたしは甘えたいんやなくて……」

ボクははやての言葉を無視しながら

「しょうがないな。そんな、甘えん坊のはやてのためにお姉ちゃんと一緒にベッドで寝てあげよう！」

「はい！？何で一緒にベッドで寝んといけんのや！それにわたしは別にそんなこと言ってな……」

「いやなの？」

「……………いやじゃないです。」

はやてがそう言うとボクははやてに抱きついた。

「お、お姉ちゃん！？恥ずかしいから止めてな！」

はやてが何やら言っているけどそんなことは無視して、ボクははやてをしばらく抱きしめていた。

こうしてボクに新しく、甘えん坊の妹ができた。

二話 家族（後書き）

明日は投稿できないかもしれません

三話 戦士との邂逅（前書き）

一話と二話をくっ付けました。

三話 戦士との邂逅

side 舞子

今、ボクははやてと一緒にボク達の家に向かっている。

あの後、ずっと空気をよんで黙っていてくれた石田先生が

「それじゃ、舞子ちゃんの退院の手続きとかは私がしてくるから、今からはやてちゃんの家に帰ってもいいわよ。」

そう言ったので、ボクとはやてはお言葉に甘えて、はやてがいるんなところを案内しながら、ボク達の家に向かっているのだった。

ちなみにボクの服は石田先生が用意してくれた。……なぜあつたのかは、気にしないことにする。ついでにボクが発見された時に着ていたというコートは目立つので、今は荷物の中にある。

「こつちの道を進むとな、わたしもよく行く図書館に着くんよ。あつ、あつちの道を曲がって、ちよつと行ったところに翠屋っていう美味しい喫茶店があるんで。」

「へーそうなんだ。図書館には一度行ってみたいとね。喫茶店にはこれから行かない？家族になったお祝いも込めて。」

「せやな！それならあつちの道や！」

翠屋に着く間もはやては上機嫌でボクに話しかけ、ボクもそれに応えていた。

しばらく行くと翠屋が見てきた。外装はなかなか良いものだったので、これなら味の方も期待できるだろうと、ボクは楽しみにしながらドアを開けた。

「いらっしやいませ。」

その声が聞こえた方を見ると、

そこには戦士がいた。

side 恭也

それは昼を過ぎ、客入りも徐々に落ち着き始めた頃だった。ドアが開く音が聞こえたので

「いらっしやいませ。」

そう言って、ドアの方を見るとそこには車イスの女の子とそれを押している少女　女の子の姉だろう　がいた。その少女は俺の方を見て固まっていた。……どうかしたのだろうか？

「どうかなさいましたか？」

「へっ!?! い、いえ、何でもありません。お気になさらないでください。」

……そう言われるとすごく気になるのだが。車イスの女の子も不思議そうに見ているし。

まあ、言われた通りに気にしないことにして、彼女達を席に案内した。

「ご注文はお決まりでしょうか?」

「ケーキセットを二つ。あと、お持ち帰りのものも用意していな

「かしこまりました。では、もうしばらくお待ちください。」

俺はすぐにオーダーを言い厨房へ向かった。

side 舞子

今はあの男の人は厨房へ行っているためいない。

それにしても、彼のもつ雰囲気は戦士のもつものに近かった。今の日本であのような雰囲気をもつとは……何か裏の出来事にも関わっ

ているのだろうか？ボクのことについて感づかれなければいいのだが……。いや、ボク自身は空手を少し習ったぐらいの、魔術を使わなければ、身体能力的にはただの一般人だ。そういったものを見抜く能力がなければばれることはないだろう。まあ、ボクの一部である人達は一般人とはとても言えないけど。

「なあ、お姉ちゃん。さっきからどないしたん？」

「ん？」

そう考えていたのが悪かったのか、はやてが不信に思ってしまった。

「はっ！……もしかして、さっきの男の人に惚れたん！？」

「へっ！？」

いや、ちょっと待て。どこからそんな考えが浮かんでくるんだ！？

「いや、はやて、それはないから。まったくないから。」

そうはやてに言っていると運悪く、その当人が戻ってきてしまった。

「お待ちせいたしました。ケーキセットがお二つでございま……どうかなさいましたか？」

「なあ、お兄さんの名前はなんて言っん？」

「は？……あ、私の名前は高町恭也と言いますが……」

「ふーん、恭也さんって言うんやね。あっ、わたしの名前は八神は

やてって言うんや。こっちはわたしの姉で、山瀬舞子って言うんや。なあ、恭也さん。彼女は今、おるんか？」

「え〜と……」

戦士の人、改め恭也さんが助けを求めるようにこっちを見てきた。ええい、こっちを見るなこっちを。

とはいえ、この勘違いむすめをなんとかしないといけないだろう。……はあ。

「止めんか。このマセガキ。」

そう言っただけは、はやての頭に拳骨を落とした。

「いった〜〜。何すんの、お姉ちゃん!？」

「恭也さんが迷惑しているじゃないか。」

「すいません、恭也さん。このバカにはよく言っただけで聞かせるんで。」

「い、いえ……」

バカって言った方がバカなんやで〜。

と、隣ではやてが何か言っているが、当然そんなことは無視する。

「ほら、早く食べないとボクが全部食べるよ。」

「あつ！それはいやや！わたしのケーキ、食べんといて！」

はやての意識がケーキに向いた時、恭也さんに目配せをする。

恭也さんは感謝するような目をして、離れていった。

side 恭也

ふう、助かった。はやてちゃんの好奇心には困ったものだな。舞子ちゃんが気を反らしてくれなかったらどうなっていたことやら。彼女には感謝しないとな。

しかし、妹のなのはもはやてちゃんぐらい活発だったなら……いや、よそう。そんなことを考えるのはなのはにも、はやてちゃんにも失礼だ。

そういえば、舞子ちゃんにはどことなく忍のような雰囲気を感じたな……。精神が歳の割に、大人びているからだろうか？二人の名字が違っているのも何か関係があるのだろう……。……よけいな詮索は止めよう。

「恭也さん。お会計、お願いします」

はやてちゃんの声だ。そろそろ、仕事に戻るつ。

「はい、分かりました。」

三話 戦士との邂逅（後書き）

明日か明後日に投稿できると思います。

四話 一日の終わり

side 舞子

翠屋から出て、今ははやての家。これからはボク達の家か。に着いた。その家は庭も広く、一軒家としてはかなりのものである。

「どつや。これがわたし達が住む家やで。」

「へえ、なかなか立派な家だね。」

「そうやるづ。あつ、ちなみにその庭でお姉ちゃんは倒れとったんよ。」

「へえ。」

ボク達は家に入るとまず、これからボクが使うことになる部屋に行った。そして、ひとまず掃除をして綺麗にした。とは言っても定期的に掃除をしていたのか、それほど汚れてはいなかった。あまり時間はかからなかったが。

掃除が終わると、荷物を整理してリビングに向かった。そろそろ夕方になってきたのではやてが

「ほな、そろそろええ時間やから、食事の準備をしてくるわ。」

と言ったので、当然ボクも手伝うと言ったのだが

「ええから、ええから。今までもやってきたし、それに、お姉ちゃんにお礼も込めて今日はわたしが精一杯ご馳走してあげたいんや。」
と言ってきて、ボクはそれでも渋っていたが、最終的にはボクが折れてはやてに任せることにした。

ボクがソワソワしながら待っていると、しばらくしてはやてが大量の料理を持ってきた。

えーと、はやてさん？ひよっとしてそれを全部食べるということですか？　ボクじゃなかったら絶対に食べきれないですよ……あくまでもボクじゃなかったの話だけ。

「いやあ、つい張り切りつてちよっと作り過ぎてしもうたわ。まあ、食べきれんかったらまた明日にでも食べればええから無理して食べるんでもええよ。」

……ふふふ。なめてもらっては困るな、はやて。ボクを満腹にさせなければこの三倍は持って来い。

いくぞはやて
料理の貯蔵は十分か

「いただきます。」

そう言っただけでボクは食事を始めた。後ではやてに聞くとその時の様子はまるで、ブラックホールに料理が吸い込まれているようだったという。

……まあ、666のケモノ達の間も栄養を摂取しないといけないか

らね。……決してボクが大食いなわけではないよ。……本当だよ。

しばらくボクの食べっぷりに固まっていたはやてもようやく動き出し、デザートケーキも食べ終わると、二人でお風呂に入った。

「ふう。いいお湯だね、はやて。」

「そう〜やな〜」

はやては、ぐで〜、としながらお風呂に浸かってリラックスしていた。

ボクはそんなはやてを見て微笑ましく思いながら、

「ほら、はやて。背中を洗ってあげる。」

「ん〜、よろしゅうな。その後で今度はわたしがお姉ちゃんの背中を洗ってあげるわ。」

「クスツ。ありがとう、はやて。」

その後、ボク達はお互いに洗い合った。その時、ボクの胸を見たはやてが「くっ、負けた。」とか言って、落ち込んでいた。何言っているんだこのマセガキは。後、ボクの胸に触ろうとしてくるな。

お風呂から上がった後もいろいろと話をしていると、もうそろそろ寝る時間になった。

「はやて、そろそろ寝よつか。」

「もうそんな時間なん？もっとお話したかったんやけどな〜」

「そんなこと言わないでさ。ボク達が話をする時間はこれからいつでも出来るんだから。」

「……………そうやな。もういつでも話をすることが出来るんよな。……………うん。それならもう寝よつか。」

そうはやてが言い、一緒にはやての部屋に入った。

……………？……………つつつ！！

はやての部屋に入った瞬間、ボクは妙な違和感を感じた。はやての部屋からは、僅かに魔力が流れていたのだ。

（何らかの魔術が行使されている！？……………でも、魔術が使われているにしては流れている魔力の量が少なすぎるし、隠ぺいをしているにしては多すぎる。魔術が行使された後という線もあるけど、それならこの部屋であつた、はやての車イスから魔力を感じないのはおかしい。……………ひょっとして魔道具が存在しているのか？もしそうならどこに……………）

そう思い、部屋の中を気を付けて見ていると、一際異様な、鎖で巻かれた本があつた。それから魔力が発生していた。

「はやて。」

「ん？なんや？お姉ちゃん。」

「あの本は何？」

「ああ、あれか。あれはな、わたしもよう分からのやけど、物心ついた時からもうあったんや。」

「へえ……そうなんだ。ねえ、はやて。あの本をボクに貸してくれないかな？ちよっと気になって。」

「ああ、あんな変な外見しとるからな。別にええよ、持って行っても。」

「そう。ありがとう。」

そう言ってボクがその本を取ろうとするど、

バチッ

「つつっ！」

（拒絶された？もしかしてこれは術者を固定して発動するタイプの魔道具。なら、この場合の術者というのは……）

「お姉ちゃん？どないしたん？」

「はやて、この本に触れたことはある？」

「?まあ、物珍しくてちょっと持ってみたりしたことはあるけど……」

「そっか……なら、その時に何か感じたりはしなかった?」

「??別に何も感じんかったけど……あっ!ひよっとしてお姉ちゃんは何か感じたん?」

「そうだね。はやて以外に持って欲しくないうって思いを感じたよ。」

「ほんまに!?!うそじゃなくて!?!」

「うん。まあ、物質が意思を持つのはめったにないけど、あり得ないことじゃないからね。彼女はきつ

と、はやてが、自分を放っておいてボクばかりかまっているから嫉妬しているんじゃないかな?」

「そうなんや。ごめんな、放っておいて。でも、舞子もわたしの家族になるから、かんべんしてやってな。」

そうはやてはその本に向かって言った。

「じゃあ、はやて。もう電気消すよ。」

「ああ!もうちょっと持って。もうベッドに入るから。」

「ボクの入る場所も空けておいてね。」

「ええ!?!ほんまに一緒に寝るん!?!」

「当然。」

うう。そうはやては真っ赤になりながらも、ボクの入るスペースを空けた。

……かわいいやつめ

ボクは明かりを消してはやてのベッドの中に入った。そして、今日の出来事を思い返しながらはやての暖かさを感じつつ、まどろんでいった。

四話 一日の終わり（後書き）

来週は投稿できないかも……

五話 自己認識（前書き）

次は土日ぐらい。

五話 自己認識

sideはやて

「…ん」

わたしはいつものように目を覚ました。すると、目の前には少女の寝顔があった。頭が徐々に覚醒してくるにつれて、

「ああ…舞子がお姉ちゃんになってくれたんやったな。」

そう口に出すと、いっそうそのことが実感できて、嬉しくなった。

「おはよう、お姉ちゃん。」

もちろん返事はない。けれども、朝起きると隣におはようを言う相手が出来たのだ。朝、目が覚めても誰にもおはようを言うことが出来ず、この広い家の中で自分一人だけが存在していることへの寂しさを感じることはもうないのだ。わたしにはそれがすごく嬉しかった。

わたしはいつもなら、もうベッドを出て、朝食を作っている時間になったが、この家族の暖かさをもっと感じていたいと思い、ここから出ることはできなかった。わたしはもうちょっとだけと思いながら、逆に舞子に近づいて、舞子が起きる時までずっと家族の暖かさを感じていた。

その時だけは、何も感じないはずの足にも暖かさを感じていた。

side 舞子

胸に小さな力を感じて、ボクは起きた。顔を少しだけ胸の方に向けると、はやてがボクの胸のあたりにピタツとくっ付いていた。ボクはそれを見て、はやてをいとおしく感じた。

「はやて、そろそろ起きないと。」

「ん〜、もうちょっとだけこのままでいさせて。」

「はあ……しょうがないね。もうちょっとだけだよ。」

などと言いながらも、ボクもけっこう嬉しかったりする。

しばらくそのままだったけど、さすがにいつまでもこうして
いるわけにもいかないの、そろそろ起きることにした。
朝食を食べている途中にはやてが

「なあ、お姉ちゃん。今日はどうするん?」

「そうだね……ボクとしては図書館に行こうと思っているんだけど、
はやても一緒に行かない?」

「せやな。わたしも一緒に行くわ。」

「そっか。なら、食べ終わったらすぐ行かない?」

「うーん、まだちょっと早いんとちゃう?」

「お話しながらゆっくり行けば、ちょうどいい時間になるよ。それに、ちょっと調べたいことがあって」

ね。はやてがよく行くっていう図書館がどれほどの物が見てみたいし。」

「ふっふっふ。期待しといてな。でも、そんなこと言うなんて、もしかしてお姉ちゃんの本読むの好きなん?」

「ん、どちらとも言えないかな。必要のある時にはためらいなく読むけど、趣味としてはほとんど読まないね。」

「そうなんか。……………いろいろとお話できると思ってたんだけどなあ。」

はやては、最後の方は小さな声で粒やっていたが、耳の良いボクには、その言葉がしっかりと聞こえていた。

(そっか……………はやては今まで話し相手がいなくて、ずっと寂しい思いをしてきたんだよね。)

そう思うと、ボクの手は自然にはやての頭をなでていた。

「……………ん。」

「うーん。でも、これからは暇な時に本を読むのもいいかもしれないね。はやて、ボクにオススメの本を選んでくれるかな?」

「えっ?あ、うん!もちろんや!」

はやては元気よくうなずいた。

あの後、食事も終わり、図書館に行くとボクは

「じゃあ、はやて。ボクは調べ物があるから、しばらくそのあたりをぶらぶらしてくるね。」

「うん、わかった。わたしはあの辺で本を読んどるから。」

そう言うてはやてと別れ、いろいろと知りたいことを調べることにした。

(とりあえず、地図を見ようかな。海鳴市ってところらしいけど、どこら辺にあるのかよくわからないしね。)

そう思い、まずは地図を見てみることにした。

(へへ、こんな所にあるんだ。けっこう三咲町から離れているんだね。三咲町がこのあたりにある……………か……………ら?)

ボクはしばらく硬直すると、あわててもう一度地図をよく見てみた。

(……………あれ?三咲町がない?そんな……………まさか……………)

何度も繰り返し見てみたが、やっぱり地図には三咲町という名前は存在してなかった。

(三咲町がない……………そんなことはボクの記憶が間違っていない

限りあり得ない。ボクの体に起きていることをふまえると、記憶違いということは考え難い。ならば何故……)

そこまで考えると昨日、はやてが「わたしの庭に倒れとった」と、言っていたことを思い出した。

(ボクはあそこから移動した覚えはない。なのに何故? いや、そもそも何故『私』は生きている?)

ボクは今まで、あえて考えてこなかった疑問を考えた。

(『私』はあの場所で確かに存在が消されるのを感じた。……いや、……)

消されたのは本当に『私』か?

確かに『私』は一度、消されるのを感じたが、それが『私』の一部ではあるが、、『私』な根源である混沌は消されなかった可能性はないか?

もしそうならば『私』は生存が可能であり、『混沌』として残ることが出来るだろう。

だが、その場合には『世界』の中に『世界』が存在することになるため、ガイアによる抑止力が働く。そして、その結果……)

「異世界に飛ばされ、『ボク』という器を与えられた……か。」

そう考えればつじつまが合う。

何故ボクという器が与えられたのか、というのはおそらく、あの中

で最も意思があつたのがボクというだけだろう。それにしても、

「異世界か……」

異世界ならば、ボクの天敵である青い目の死神に会うことはないだろうが、明美にも会うことはできないだろう。もう会わないと決心したが、会うことができないとわかると悲しい気持ちが湧き出てきた。

（我ながら未練がましいな……。独りが嫌だったのは、はやてだけでなくボクもだったようだ。）

ボクはしばらくそこを動くことが出来なかった。長い時間が過ぎ、ようやく気持ちの整理がつくと、ほったらかしにしていた、はやてを探しに行った。

（え〜と、はやてはこのあたりにいるって言っていたよね。）

ボクはキョロキョロとあたりを見回していると、見知らない女の子と一緒にいるはやてを見つけた。

「はやて。」

ボクがそう呼び掛けると、はやてと隣の女の子が振り向いた。その子は長くて綺麗な髪と宝石のように透き通った目をした女の子だった。

ボクは無性に血がざわめくを感じた。

五話 自己認識（後書き）

オリ設定の補足説明

直死の魔眼は死を理解できるものしか殺せないため、志貴は混沌の死を理解しておらず、表層意識の死と誤認してそれを殺した。そのため、本文のようになった。

六話 すずか（前書き）

作者はとら八を知りません。

六話　すずか

sideすずか

その日、わたしは図書館に来ていた。面白そうな本を探していると、わたしぐらいの歳の、車イスに乗った女の子を見かけた。

「うーん、うーん。」

その子は本棚の上の方へ手を伸ばしていたが、とどかないで困っているようだった。わたしはその子が取るうとしていた方を取ってあげた。

「どうぞ。これですよね?」

「あっ、おおきに。……そういえば、あんさんもよくここで見かけるな。やっぱり、本が好きなん?」

「そうですね。様々な知識を吸収していくのが楽しいです。あと、本のジャンルとしては物語が好きですね。」

「あんさんもなん?わたしもなんよ。わたしのおすすめはな、『アサー王物語』っていう本でな、……………」

その後しばらくの間、わたし達は本について話し合った。そして、一段落ついたところで、

「そういえば聞くの忘れとったけど、あんさんの名前は何て言うん？」

「あっ、そういわれてみれば言っただね。わたしの名前は月村はずかって言います。」

「そっか。なら、すずかちゃんやね。わたしの名前は八神はやてって言うんよ。よろしく、すずかちゃん。」

「うん。こちらこそよろしく、はやてちゃん。」

わたし達の自己紹介が終わったところで、ちょうどはやてちゃんを呼ぶ声がした。

「はやて」

わたし達は同時に声のした方を向くと、そこには吸い込まれそうなほど黒い目をした、わたし達より少し上ぐらいの女の子の姿があった。

「お姉ちゃん！」

はやてちゃんが嬉しそうな顔をしてその子を見た。わたしは何故かその子から目が離せなかった。

「はやて、もうちょっとボリウム落として。」

その子は苦笑しながら、でもどこか嬉しそうにそう言った。はやて

ちゃんは慌てて口元を押さえると、恥ずかしそうにほんのり頬を赤くした。そして、少しポリウームを押さえて

「お姉ちゃん、この子はたった今、知り合った月村すずかちゃんって言うんや。」

はやてちゃんがそう言うと、その子はわたしの方を向いた。わたしは心臓の鼓動が速くなるのを感じた。

「月村すずかちゃんって言うんだ。ボクの名前は山瀬舞子。はやての姉をやってます。よろしくね。」

後、はやての友達になってくれないかな？この子には友達がまだいなくてね。それが心配で、心配で。」

よよよと、舞子さんは涙を拭う（ぬぐう）まねをしてそう言った。はやてちゃんが「そんなこと言うな！！」と、怒って舞子さんに突っ掛かっていった。わたしはそれを見ながらも、どこかぼんやりしていた。

「すずかちゃん？」

それに気付いた舞子さんがわたしに話しかけると、わたしは慌ててしまい、

「は、はいっ！」

少し声が裏返ってしまった。

その声で舞子さんとはやてちゃんが、びっくりしてわたしを見た。わたしは恥ずかしさで、顔が真っ赤になるのがわかった。

しばらく、その何とも言えない空気をあじわっていると、舞子さんが

「え と……そろそろ出ない？周りの人の目も痛いし。」

そう言ってきた。

そう言われてハッと、はやてちゃんと一緒に周りを見てみると、迷惑そうな目でこつちを見ている人達がいた。

わたし達は愛想笑いをしながらその人達に頭を下げると、そそくさと図書館の外に出た。

うう…恥ずかしかった。

外に出ると、舞子さんが再び話しかけてきた。

「すずかちゃん、さっきの話だけど……」

「えっ、さっきの話ですか？」

「そう。はやての友達になってねってという話。」

「あ、はい。わたしでよければ、勿論かまいませんが……」

「そっか。はやて、良かったね。初友達だよ！」

そう舞子さんが言うと、はやてちゃんはどこか納得していない表情で

「うう。何かから何までお姉ちゃんにお膳立てされて、何か釈然と

せえへんわ。」

と言った。

「そう思っつゝならここからは、はやてが言わないとね。」

「わかつとるわ。」

そうはやてちゃんが答えるとわたしの方を向き

「…すずかちゃん、わたしの友達になってください。」

そう言った。

わたしは当然のように

「勿論だよ。これからよろしくね。」

そう言って、わたし達は握手をした。

その後しばらくして、はやてちゃんが

「あつ、すずかちゃん。お姉ちゃんとも友達になってくれへん？」

「「へ？」

わたしと舞子さんの声がハモった。

「お姉ちゃんには今、友達どころか知り合いすらほとんど居らんか

「らな」

「失礼な！石田先生という知り合いがいる！」

「一度しか会ったことないけどな」

「ぐっ……」

「ふふん。さっきのお返しや。」

「……ふふふ」

「お、お姉ちゃん？」

「ふふ………帰ったら覚悟しろ。」

「ひっっ！」

舞子さんが危険な空気を辺りに撒き散らしている中で、わたしは冷や汗を流しながら、

「え、えっと……わ、わたしは構いませんよ。」

「へ？」

「あの、舞子さんと友達になることです。」

「あ、ああ！そのことか！ごめん、はやてにどんなぐっも……もと
い、折檻を与えるか考えていたから、一瞬わからなかったよ。」

舞子さんはとてもいい笑顔でそう言った。はやてちゃんは真っ青になり、ガタガタとおびえてしまった。そんなはやてちゃんを見ないようにしながら

「会ったばかりでこんなことを言うのもなんですが、舞子さんとは仲良くなりたいです。」

わたしがそう言うと、はやてちゃんが拗ねながら

「ふん。わたしとは仲良くなりたくないってことやね。」

と言った。

「えっ！いや、そういうことじゃなくて…」

わたしが慌ててそう言うと、舞子さんが笑いながら

「あはは。そう言ってもらえると嬉しいよ、すずかちゃん。はやてもすずかちゃんをとったりしないから拗ねないで。」

「拗ねとらへん！」

「それとも、ボクがすずかちゃんにとられるかもしれないから、意地悪を言っているのかな？」

「なっ！」

はやてちゃんは顔を真っ赤にしながら、口をパクパクしていた。…舞子さんの方が一枚上手のようだ。お姉ちゃんにいつもからかわれているわたしは、はやてちゃんに親近感を感じてしまった。

舞子さんは、しばらくはやてちゃんをからかっていたが、やがて満足したのか、わたしに向き直り

「さっきの話に戻るけど、ボクも大歓迎だよ。」

「なら、わたし達も、もう友達ですね。」

「そうだね。両思いだね。」

「へ？」

わたしはその意味がすぐには分からなかったが、やがてその意味が分かると、わたしは再び顔が真っ赤になった。冗談だと分かってはいるのに、つい反応してしまった。……だからお姉ちゃんにもからかわれるのかなあ……

「うっ」

はやてちゃんはどこか嫉妬の込もった目でわたしを見て唸っていた。しばらくして、

「ふう……そろそろ二人をからかうのも飽きたし、もうお開きによっか。」

「「飽きたって……」」

わたしとはやてちゃんは同時にそう呟くと

「「はあ」「」

また、同時にため息をついた。

舞子さんはそんなわたし達を無視して

「それじゃあね、すずか。今度、ボク達の家遊びにおいでよ。」

「あ、はい。舞子さんとはやてちゃんもぜひわたしの家に遊びに来てください。」

「せやな。いつかお邪魔するわ。」

またな。そう言うてはやてちゃんと舞子さんは行ってしまった。

（また会えるといいな。）

わたしはそう思いながら、お姉ちゃんに今日のことをどっさり話そうかと、ワクワクしながら帰路についた。

七話 地下室の鍵（前書き）

後半、オリ設定入っています。

七話 地下室の鍵

side 舞子

ボク達は今、帰り道の途中の公園にいる。昼食を抜かしたために夕食まで耐えられなくなり、ちょうど公園に来ていたクレープ屋でクレープを買った。隣では、はやてが自分のクレープを食べている。ちなみにボクの分はとくに食べ終わっているので、もうない。

「お腹空いた〜」

「お姉ちゃん……さっきクレープを食べたばかりやん」

「昼食の代わりとしては全然足りないよ。はあく、いつの間にか昼食の時間帯を過ぎていたなんて……この分は夕食で取り戻さないとね！」

「……食費が今までの何倍になるんやろ……」

はやてがどこか遠い所を見ながらそう言った。

ボクはそんなはやてを横目で見つつ、これからの事について考えていた。

（さて、これからどうしようか。ここは異世界のようだけど、元いた世界に近い世界のようだし。細部はもちろん違っているだろうけど、大まかには違ってない。……とりあえず、ボクの一般常識は通用することがわかった。だから、問題となるのはこの世界の暗部についての何か……。はやての所にある魔道具もおそらく、それに関係しているだろう。）

そうすると怪しいのはグラム叔父さんという人か。しかし、はやてでさえ会ったことのない人物に、ボクが会いたいと言っても会える可能性はほとんどないだろう。そうするとやはり、この周辺の情報から地道に集めていくしかないか……。

ちよつと暗部を知っていると思われる人物を知ってるし。彼の周辺をケモノ達で監視して、少しずつ搜索範囲を広げていけば、いづれグラム叔父さんにつながる情報が入ってくるかもしれないしね。

ボクは昨日、翠屋で会った彼のことを思い出しながらそう考えた。

考え終わると同時に、はやてもクレープを食べ終わったようなので

「はやて、そろそろ家に帰ろっか」

「はい」

そう言い、家に向かった。

家に着くと、ふとした違和感を感じた。それはいつもより注意深く周辺を探っている今だからこそ感じることできるものだったが、普段なら決して感じる事が出来ないほど小さなものだった。

ボクはすぐに魔術を行使して辺りを探った。そしてついに、その違和感が何なのか理解した。

（これは……結界か！しかも相当薄い。これなら例え魔術師であつ

ても並大抵の者ならば辺りを探索したとしても違和感すら感じないだろう。)

ボクがしばらくの間、呆然と家の前に突っ立っているのを不審に思ったのか

「お姉ちゃん？」

はやてが不思議そうに振り返って言った。

ボクは自分でもこのまま立っているわけにもいかないと思い、とりあえずはやてと一緒に家の中に入ることにした。

自分の部屋の中に入ると、再びさっきの結界について調べることにした。

(…………… 結界の効果としては内部の魔力の隠蔽と外部への認識障害。認識障害は外部の者が無意識にこの家を避けるというもの。これなら例え、外から魔術師がボクを探しに来たとしてもこの家に来ようという強い意志がなければ、ボクがこの家に居る限り見つけることは出来ないだろう。

…………… これ程の結界を張るのは1日や2日では不可能だ。そうなる と目的はボクではなくはやて、もっと正確に言うところあの魔道具ということになる。それならば、確実にはやてとボクは巻き込まれるだろう。ならば、その時にはやてを守るための用意をしておかないといけないね。それに、監視者も見つけておかないと。)

結界には内部の様子を監視する効果はなかった。これ程の結界を張った者がそんなミスをするとは考え難い。ならば、結界に頼らずに別の方法で監視をしていると考えるのが自然だ。

(問題はそれが何かということだけど……。意志のないものやたいした意志のないものならば、ケモノ達を使えばすぐに発見できるだろう。しかし、ある程度の意志があり、簡単な魔術が使えるぐらい高度な存在ならば、ケモノ達だけでは荷が重いだろう。だから、ボクが出るしかないのだが、はやてのそばをあまり離れるわけにはいかない。

そうなると高度な使い魔をひそかに作って、その子に探索をさせればいいのだけど……。ついでにその子にボクがいない間のこの家のことも任せようか。)

そう考えたものの、使い魔の素体も使い魔を作る工房もない現状では、ボクが求めるような高度な使い魔は作れないので、とりあえずは全て保留にすることにした。

頃合いを見計らって、はやてに工房に使えそうな部屋がないか聞きに言った。

「ん〜？あまり人の目に付かなくて、大きな音がしても外に響かないような部屋はあるか？」

「うん。ぶつちやけると秘密の研究室が欲しい」

「おおっ！！秘密の研究室か！男のロマンやな。それなら地下室を使うとええで」

いや、ボクもはやても女でしょ。っていうか

「あるの!？」

実際、聞いた自分でもあるとは思ってもみなかったよ……。

「うん。お父さんがな、『いずれこれを使う時が来るだろう。』って言って作ったんよ」

お父さん、何者ですか。

「お母さんもな『あらあら、しょうがない人ね。』って言いながら笑ったで」

お母さん、止めましょうよ。

「まあ、お姉ちゃんが使ったらお父さんの言う通りになったんやから、お父さんにちゃんと感謝せんとな」

いや、まあ、その通りなんだが……なんとなく釈然としないのはなぜ?

「まあ、とりあえず、その地下室を見せてくれない?」

「ええよ。ええと……地下室の鍵は………これや!はい、これが地下室の鍵や。スペアはないからなくさんとな。地下室は、廊下の突き当たりに地下へ降りる階段があるから、それを降りたらすぐや」

ボクははやてから地下室の鍵をもらつと、早速行ってみることにした。すると、はやてが後ろから声をかけてきた。

「しばらく、地下室で時間をつぶしといてな。その間に夕食を作るとるさかいに」

「うん。そうしてくるよ。あっ！それからはやて、夕食は昼食の分も含んでいるから、昨日の三倍ね！絶対だよ！もし用意できなかつたら……ふふふ」

「イ、イエッサー!!」

はやては汗をだらだら流しながら敬礼した。………どうかしたのだろうか？

後ではやてに聞くと、その時のボクの顔は「足りない分は、てめえの首で満足してやるよ。」と言っていたらしい。……顔に出てたかな？

まあ、それはともかく、ボクは地下室に向かった。

さてさて、どんなものだろうか？

七話 地下室の鍵（後書き）

地下室のことは「都合主義」ということで……。後、はやての両親のことも……。ご都合主義の度に、お父さんは出て来ます。

八話 はやての受難

side 舞子

地下へ向かう階段を降りると、目の前には鉄の扉があった。

「……………なんだか、すつごく“らしい”んだけど」

そのドアはいかにも、「この部屋で怪しい研究をしていますよ」と、大声で言っているような扉だった。

ボクは一瞬、この部屋に入るのを止めようかと思ったが、グッとそれをこらえてこの部屋の扉を開けた。

「ふん、なかなか広いね」

その部屋はかなりの広さがあった。

「うん。電気は通っているみたいだね」

ボクは電気をつけると、その部屋をじっくりと見てみた。

「ええと……………何も無いね」

じっくりと見てみたが、やはり、何もなかった。もう少し色々なものが置いてあるかと思っていたか、本当に何もなかった。一種の巨大な箱のようだった。

「これなら“もの”がそろえば、すぐにでも工房として機能できるね」

実際にはその“もの”がないから、機能するにはもうしばらくの間が必要だけど。

ボクはとりあえず、この工房（予定）に結界を施すことにした。

「
」

ボクはしばらくの間、結界作りに精を出した。

「……ふう。」

ボクは結界を作り終わると、緊張をといった。

「急作りだけど、まずまずの出来かな」

結界の効果は、魔力が漏れないようにするものだ。後、念のために人払いの効果も付与した。

と言っても、それ程性能が良いものではないので気休め程度にしかならないが。いずれ、もっとしっかりしたものを張り直さないといけないだろう。

ボクはこの部屋のスイッチを切ると念のため、見張りに数体のケモノ達を残すと、この部屋を後にした。

sideはやて

わたしは今、膨大な量の料理を作るために孤軍奮闘している。

「昨日の三倍って………明らかに十人前以上はあるやろ………」

そんなことをぼやきながらも、手は止めずに料理を作っている。正確に言うと、少しも手を止める余裕はない。

（お姉ちゃんのあの目は絶対に、我慢できなくなったらわたしを食べようと考えとる目やった。図書館で言ってたこともあるし、急いで作らんと命にかかわる！）

わたしはそう考えると、さらに作るスピードを上げた。

「はやて、もう出来た？」

！？あかん！お姉ちゃんが帰ってきた！まだ料理は全部は出来とらんに！何とかして時間を稼がんと！

「ま、まだなんよ。テレビでも見てもうしばらくの間、時間をつぶしとって」

「ん、わかった。もうしばらく待つね」

ふう。これであと数分はもつやる。今のうちに何とかして全部の料理を作らんと。

わたしはそう思ったけど、お姉ちゃんはそんなに甘くはなかった。

「はやく、完成した〜?」

!? そんな! まだ数分どころか、数十秒すら経過してないのに!

「ご、ごめんな。あと少しで出来るから」

「ふん」

あ、あかん! このままでは食われる!

わたしはさらに作るスピードを上げた。そのスピードは、人の限界すら超えていた。しかし、そんなわたしの努力を嘲笑うかのように、お姉ちゃんの声が聞こえた。

「……………まだ?」

ひい!!! お姉ちゃんの声が一段下がった!?

「も、もう少しやから! 本当に、あとちよつとだけ待って!」

わたしは命の危険を感じながら、そう答えた。

「……………そう」

わたしは、次はもうないぞというお姉ちゃんの視線、いや、死線を感じた。わたしはただらと汗を流しながら、さらに作るスピードを上げた。そのスピードはもはや音速すら超えていた。そしてつい

に、

「……はや」できたで!!!」「本当!」

わたしはお姉ちゃんの声に被せるように言った。お姉ちゃんは「や」と食事でありつけるよ。」と、喜んでいたが、わたしは十数時間ぶりに食事ができることよりも、お姉ちゃんに食われそうになる恐怖から逃れられることが嬉しかった。

わたしはお姉ちゃんと一緒に料理を運んで、そして、テーブルに着くと、

「いただきます」

そう言っただけで食べた。

わたしはようやく危険から逃れられたことに、ほっと安堵した。そして、料理を作り終えたことへの達成感に包まれながら、ゆっくり味わって食べようとした、その時、

「おかわり!」

「へ?」

お姉ちゃんの声で、お姉ちゃんを見、そしてテーブルを見ると仰天した。テーブルには、あれだけあった料理はすでになく、空のお皿しかなかった。

「ええと……」

「お・か・わ・り」

「は、はい！」

お姉ちゃんの、殺気のもった目を向けられると、わたしは急いでテーブルに入り切らなかつた、まだまだたくさんある料理を取りに行つた。

一度で全部運べるわけではないので、持てれるだけ待つてテーブルに運び、そして、すぐに台所に戻つて料理を取り、再びテーブルに運ぶと、一回目に持つて来たお皿はすでに空になっていた。わたしは一応お姉ちゃんに聞いてみた。

「ええと……お姉ちゃん？最初に持つて来た料理はどないしたん？」

「ん？そんなのもう食べ終わつたに決まっているよ。そんなことよ、次の料理を早く！」

「……………はい」

わたしはまた料理をテーブルに置くと、また台所に戻り、次の料理を取つた。

わたしはこれが料理がなくなるまで続くんだろうなと、どころか他人事のようにそう思った。そして、自分の食べる料理がなくなつてしまつたろうことも薄々とわかつてしまつた。

「はやて、次の料理まだ？」

「はい、すぐに持つて行きます」(泣)

九話 夜の公園

side 舞子

今、はやては隣で精根尽き果てて眠っている。

あの後、はやてが「わたしの分も残して〜（泣）」と、泣きついてきた。ボクはお仕置きの意味も含めて、そんな言葉は無視しようと思っただが、さすがに本当に泣かれたら困るので、少しだけ分けてあげることにした。するとはやては、「あゝりかとう〜」
と言って、こつちが若干引くぐらい泣いて感謝して来た。……………
……………結局泣くのか。

はやてが食べ終わった後は、はやてがもうフラフラしていたので、早めに寝かせた。そして、ボクも今まさに寝ようとしていた。しかし、ボクはやらなければならぬ事を思い出した。

「あ……………公園に残してきたケモノ達のことを忘れてた」

ボクは今日、公園に行った時に町の探索用に数匹のケモノ達を潜ませておいたのだ。

「ケモノ達を使った転移ならば、『私』から『私』への移動であるので魔力を使用しない。だから、監視者にもばれることはないだろう。……………はあ、こんな形で公園に出しておいたケモノ達が役立つとは思わなかったよ」

ボクはケモノ達と視界を共有し、周辺に人がいないことを確認すると公園に転移した。

「……………やっ」

(ここなら監視者の目も今はないだろう。しかし、家と近いので絶対ないと言い切れない。早く用事を済ませないと)

ボクの用事とは町の全域を探索できる数のケモノ達を出すことである。公園では、はやての目があったために、さすがにそれほどの数のケモノ達を出すことはできなかったのだ。

ボクはそう思うと、十数匹のカラスと同じく十数匹のクロネコを出した。そして、町全域に散らばるように命令した。

(これでひとまず目的は達成した。他にやらないといけないことは……………あっ！監視者と戦うことになった時のために、武器がいるね)

実際に戦うかどうかは分からないけど、彼らに命令を出している人の目的について聞くために、顔を合わせる必要があるだろう。その時に戦闘がないとは限らない。そうなった場合、戦闘の準備をしておかないとまずいことになるだろう。それにもし交渉が決裂した場合、敵がはやてを狙ってこないとは限らないのだから。自分だけならまだしも、はやてを守るためにはケモノ達だけでは心もとないのだ。

例えば真祖の時のように、ケモノ達は一定の強さ以上の相手から守る、ということにおいてはザルも同然なのである。安心してはやてを任せられるわけがない。だから、いざというときにはこの身を盾

にしても守るらないだろう。幸い、ボクは滅多なことでは死なないので、盾としてもってこいである。とはいえ、出来る限りはそんなことは避けたい。はやてが悲しむだろうし。

だから、ボクはケモノ達に頼らない戦闘もしないといけないのだが、ケモノ達以外の戦闘手段となると、素人に毛が生えたぐらいのボクの空手が志貴の戦闘技術、または、フォアプロ・ロワインの魔術となる。しかし、ボクの空手はプロ相手には通用しないだろうし、フォアプロ・ロワインの魔術は戦闘用ではない。となると、志貴の戦闘技術しか残ってないのだが

(得物が無いんだよねえ)

本来はこの技術は得物を選らばないのだろうが、そんな応用をちょっと前まではただの一般人であったボクに求めるのは酷というものだろう。いくら志貴の身体の一部があると言っても、所詮は一部。精々、志貴の劣化版ぐらいにしか成れないのだ。それならば得物を志貴のものに揃えて、なるべく志貴に近づけた方がまだまじだろう。

(得物……志貴ならばナイフか……どうしよつか？……やつぱり買っしかないよねえ。お金はないけど。……まあ、なんとかなるよね。例え、なんとかならなくてもしてみせるだけだし。手段さえ選らばなければお金を得る方法なんてごまんとあるし)

どこからか、「手段は選らばんといけんで〜」という電波を受信したが、同然のように無視して方法を考え始めた。

(うーん、地道に働くという手はないね。時間がかかるし、そもそも働かせてくれないだろう。盗むのもなし。その後の後始末がめんどう。そうになると、誰か親切な人からもらうぐらいしかないかな。

でも、そんな人がそこら辺にいるとは思えないし……………)

ボクはしばらくの間考えていると、ふと、思い付いた。

(そっか！ボクには魔術があった！魔術を使えば簡単にお金を手に入れることが出来るかも……………)

しばらく、魔術を使ってお金を手に入れる方法を考えていると、ついに考えついた。

(そうだ!“釣り”をすればいいんだよ！それなら簡単にお金が入るし、今すぐに始められる！)

そう思うと、善は急げとばかりに町に向かった。

十話 釣り(前書き)

人物設定を削除しました。

十話 釣り

side 舞子

“釣り”に必要なもの……………若い綺麗な女の子

“釣り”に適切な場所……………人目に付かない所

諸注意

自分の実力に自信のある人だけやりましょう。

良い子は真似しないでください。

今、ボクは町に出て“釣り”をしている。

(どっかのバカが引っ掛つてくれないかな)

要するに、ボクを拐おうとする人から、逆にお金を拐おうとしているのだ。

そして、しばらくフラフラと歩いているとついに

「どうしたんだい、お嬢さん？」

と、一人の男が笑いながら話しかけて来た。

その男の顔からはあからさまに、適当なことを言っただろうかに連れて行くとういう魂胆が見て取れた。

その男の背後をチラリと見ると、その男と同じようにニヤニヤと笑っている男達が4人ばかりいた。

ボクは内心ではニヤリと笑いながら、表面上はとても心細そうに、

「お父さんとはぐれちゃったの……………」

と、言った。

その男は、しめたとばかりに、

「そうなんだ。お兄さん達がお父さんの居場所を知っているから、連れて行ってあげるよ」

と、言った。

ボクは、かかったと思いながら、そんな事はおくびにも出さずに、

「ほんと！ありがとうございます、お兄さんたち！」

と、とても嬉しそうに言った。

ボクがそう言うと、その男と後ろにいた4人の計5人でボクを囲うようにして、「こっちだよ。」と、言いながらボクをどこかに連れていった。

あの後もしばらく歩き続けていると、だんだんと人気が少ないなっ

てきた。

ボクは不安そうに、

「まだ、お父さんに会えないの？」

と、言った。

男達は腹に一物ありそうな笑い声をあげると、

「もうすぐだよ。ほら、あそこに見えるビルにお父さんはいるから」

そう言っつて廃ビルを指差した。

「本当に！お父さんはあそこにいるんだね！」

「そうだよ。だから、もう少し頑張ろうね」

「うん！」

そう言っつて男達とボクはさらに歩くスピードをあげた。
そして、ついに廃ビルについた。

「お父さ〜ん、どこにいるの〜？」

ボクは一応そう呼んでみたが、もちろんその声に対する返事があるはずもなく、男達を不安そうに見た。

「ねえ、お父さんはどこにいるの？」

男達はその声を聞くと、とうとう笑い声をあげた。

「ギャハハハ、そんなのいるわけねーだろ！」

「ここにいるのは俺達だけだ！」

「まさか、あんなのに引つ掛かってノコノコついてくるやつがいるとは思わなかったぜ！」

「お嬢ちゃん、知らない人についていたらいけないってお父さんから習いませんでしたか？」

「そうそう。さもないと、こんなふうに悪いお兄さん達に拐われちゃいますよ。」

そう言って、再び男達はゲラゲラと品のない笑い声を出した。

ボクはそれを聞いて、身体を震わせた。

それを見た男達はさらに笑みを強めた。

「オヤオヤ、どうしたのかな？お嬢ちゃん」

「大丈夫、怖くなんてないよ。お兄さん達がついているから」

「そうそう。最終的にはお父さんのところにちゃんと連れていってあげるから」

「ま、過程はどうなるか分からないけど」

「そうそう」

私はそこまで聞くについに堪えきれず、笑い出してしまった。

「クツククク……………アハハハ！」

男達はいきなり笑い出した私にギョットした。

私はその顔を見て、さらに笑った。

「ククク……………すまない。あまりにも予想通りに踊ってくれたのでね。つい、吹き出してしまった」

「なんだと！このガキめ！」

私の言葉に男の一人が怒り出した。

私はその言葉に、表面上は宥めながら言った。

「まあ、待て待て。私としてはこれからお金をくれるお前達には感謝しているのね。今ここで持っているお金を全て渡してくれたらこのまま見逃してやるわ」

「なっ！てめえ！」

男達は私の上から目線に顔を真っ赤にしてきたが、私はそれに構わずに続けた。

「私にはこんな所で潰す時間はないのね。お金を渡す気がないのなら、さっさと別の方法を取るとしようか」

「なんだと！それはどういう……………」

私は男達が言い終わる前に、

「チャーム
魅了」

男達に魔術をかけた。

男達は茫然と佇たたずんでいた。

私はそんな男達の様子を見て魔術がかかったことを確認すると、

「私に財布を渡せ」

男達に命令を下した。

私にそう言われると、男達はフラフラとした足取りで私の所に来て、自分たちの財布を渡した。

私は財布の中身を確認すると、全部で十万円程度あった。

「まあ、こんなものだろう。他にもお金を持っていないか？あったら渡せ。なかつたら失せる。ああ、後、私のことは忘れる」

そう言うと男達は隠していたお金も全部渡して、フラフラとどこかへと消えていった。

「さて、これで資金は調達できた。次はこの時間に刃物を扱っているお店を探しましょう」

そう言い、私は町の中に再び入っていった。

十一話 黒鍵（前書き）

今回はオリ設定やオリキャラがあります。

十一話 黒鍵

side 舞子

あの後ボクは背格好を変えて 文字通りに作り変えて 、ボクの使う刃物を置いてあるお店を探すために町の中を歩いている。とはいっても実際に探しているのは、ついさっき町に散らばらせたケモノ達だが。ちなみに外見は眼鏡を外した志貴である。

「裏側の人間がこの近辺にいるならば、こんな時間でもやっている怪しい店があると思っただが……」

まあ、完全な偏見ではあるが。

「ふむ………これ以上時間がかかるようなら、もうこの時間にやっている店はないとみて出直すか？」

私がそう考え始めた時、ついにケモノ達の一匹がソレっぽい店を見つけた。私はすぐにその店に行った。

「いかにもという感じはするが………実際にこんな店があるとは思ってもみなかった。これが隠れた名店なのか、それとも見た目通りの店なのかは入ってみないと分からないな」

私は覚悟してその店の中に入った。

その店の中は外見と違ってずいぶんまともだった。

「ほう……どうやら当たりだったようだな」

店で売られている刃物はどれも見た目だけではなく、実用性にも優れていた。

（これは機会があったならば、戦闘用だけではなく鑑賞用にも買いたいものだ。だが、今は戦闘用のナイフだな。）

私は自身の手にしっくりくるナイフを探した。

しばらく、いろんなナイフを見てまわったが、なかなかこれだというものは見つからなかった。

これはもう妥協するしかないか……と諦めかけた時、奥からその様子を見ていた、この店の店主らしき人物が話しかけてきた。

「何をお探ですか？」

「ん？ああ、私の手に馴染むナイフを探しているんだがね、なかなか見つからなくて困っているんだ」

私がそう言うと店主はしばし考えて、その後、店の奥に消えた。そして、すぐに戻ってきた彼の手には一つの木箱があった。

「こちらはどうぞでしょうか？」

そう言ってその木箱を開いた。そこには志貴が持っていたナイフと瓜二つのものがあった。さすがに『七夜』の文字はなかったが

「ほう………なかなかのものだな。だが、どうしてこれを私に？」

「いえ、この商売長くやっているとお客様に合うものが分かってくるものですよ。ですから、あなた様にはこちらのナイフがぴったりだと思っただ次第です」

私はこのナイフを取ると、刃を出してみた。

「ふむ………切れ味は良さそうだな。………それに頑丈そうだ」

「はい。少々のことでは刃こぼれすらおこりません」

私はその場で2、3回ナイフを振ってその感触を確かめると、このナイフを買うことに決めた。

「ふむ………悪くない。………よかろう、気に入った。これにするとしよう。店主、いくらだ？」

「はい、このぐらいです」

店主の示した額は持っているお金の半分以上がぶっ飛ぶほどだった。

「………高いな。もう少し何とかならないか？」

「いえ、これでも精一杯勉強しています」

「ん、他にも投擲用のナイフを数ダース買うからまけてくれないか？」

「……………それでしたら」

私は投擲用のナイフを3ダースほど買うことにした。そして、ナイフを全て買った後、ふと目につくものがあつた。

（ん？あれは……………っ！馬鹿な！なぜあれがここにある！？）

その形は黒い柄に、不釣り合いなほど長く細い両刃の剣。それはまさに、あの代行者が使っていた黒鍵だつた。私が黒鍵を眺めているのに気付いた店主は私に話しかけた。

「それは私にも使い道が良く分からないものです。持って使うには柄が短く、投げて使うには刃が長すぎて使えないのです。飾るにしても少々地味でして……………しょうがないのでそこに置いてあるのです」

私は店主に黒鍵のことを聞く事にした。

「店主、これはどこで手に入れたんだ？」

「これですか？これは数日前に見つけたものです。使い道も分からないので、そう高いものではありませんが」

「そうか……………」

（これは私の世界からこつちへ来た黒鍵だろう。そうになると、まれに向こつちの世界からこつちの世界に流れてくる物があるのか？いや、そんなことが出来るのは宝石翁だけだ。ならば……………あの場所にあつたものが、私がこつちに飛ばされた時に一緒に飛ばされたと考えるのが自然か。）

私はそう結論付けると再び黒鍵をどうするか考え始めた。

（黒鍵か……一応使い方は知っているな。だが、代行者ではない彼の知識でどこまで使えるようになるかは未知数だな。

しかし、使えるにしる、使えないにしるここに置いておくのはもつたいたないな。柄さえあれば刃は消しておけるので服に大量に仕込むことが出来るから暗器としても使えるし、威力も鉄甲作用を施さなくても投げナイフよりは遥かに高い。柄は魔術を使えば増やすことが出来るから工房ができれば武器には困らなくなる。

そう考えてみると、やはりここで買った方がいいか……）

「店主、この剣はいくらだ？」

「これですか？そうですね……使い方も分からないですし、元手はただですからこのぐらいでどうでしょうか？」

店主の示した額はナイフの五分の一以下だった。私はその額で黒鍵を買うことにした。

「はい、それではお買い上げありがとうございます。お買い上げになった物の整備もここで行っておりますので、その際はぜひご利用ください。むろん、お金は取りますが」

「ああ、そうさせてもらおうよ」

私はそう言い、店を後にした。

店から出るとすぐに転移で家に帰り、地下室に行つて買った物の確認を簡単に済ませると、さっさと部屋に戻つて寝た。

十二話 崩れる日常（前書き）

ずいぶん久しぶりです。一応ひと段落したので投稿します。次も結構遅くなると思います。

十二話 崩れる日常

side 舞子

今日は一人で図書館に来ている。なぜ一人で図書館に行くことになったのかというと……

回想

「はやく、今日はどうするの？」

「ん、今日は定期検査の日なんよ」

「そっか……なら、ボクもついて行くよ」

「ありがとう。……あっ！」

「えっ？なに？どうかしたの？」

「そう言えば、今日は本の返却日やった！どないしよう！？」

「落ち着いて、はやく。検査ってそんなに長くかかるものなの？」

「うーん……いつもはそんなに長くはかからんのやけど、今日は年に一度の精密検査の日なんよ。せやから、今日はまる一日かかるんよ」

「ん〜、ならボクがはやてを病院に連れて行った後で図書館に行って本を返しておくよ」

「えっ、ええの!?!」

「うん。でも、その代わりはやての側には居られないから、寂しくても我慢してね」

「なあ!?!さ、寂しくなんかいわ!?!」

「そっ?ならいいんだけどね」

「む〜……でも、お姉ちゃんの方は大丈夫なん?特に、食事とか食事とか食事とか」

「あっ」

「……………(じー)」

「ま、まあ、昼食だけなら外で食べてくるから大丈夫だよ、うん」

「量はいつもよりずっと少なくなるけどなあ〜」

「ぐっ!」

「ちなみに、けっこう遅くなるからいつもより夕食の時間は遅くなるし、いつもみたいに大量には作れんで」

「ぎっ!」

「……（じー）」

「……（だらだら）」

「……（じー）」

「……（だらだら）」

「……（じー）」

「……… お願いします、はやくさん。何とかしてください」

「……… ふう、しゃあないな。ちょっと時間はかかるけど、これから食事を作るから、昼はそれを温かめて食べて。その代わり、夜は我慢してな」

「ありがとう！…！」

みたいなやり取りがあった。最後の方はあまり関係ないけど概ねそんな感じだ。そういうわけでボクは今図書館に來ている。

そして本を返した後、少しだけ本を見てから出ようと思い、本をパラパラ見ながらうろついているとすずかを見かけた。すずかは高いところにある本を取ろうとしているのか、本棚の上の方を見つめていた。ボクはそんなすずかに声をかけようとしたとき、すずかが子供にしてはありえない位のジャンプをして、上のほうにある本を取ったのだ。

「……………（ポカーン）」

ボクは思わず固まってしまった。そして、何か気配を感じたのか、ふとこちらを向いたはずかと目があった。

「……………」

すずかも固まってしまった。そのまましばらくお互いが固まったままの時間が流れていたが、埒が明かないと思い、こちらから話しかけることにした。

「えーと……………」

「！」

ダッ

ボクが話しかけたとたんすずかが勢いよく逃げ出した。

「ちよっ！」

それはもうこっちが感心してしまうぐらいの逃げっぷりだった。ボクは一瞬、その逃げっぷりに固まってしまったが、我に返ると慌ててすずかを追いかけた。

「ま、待って！すずか！」

しかし、そう言われて待つ者などおらず、ボクが外に出たときにはすずかはもうすでに視界からいなくなっていた。

「ああっ、もう!」

ボクはいらだって近くのコンクリートの壁を殴った。……ボコツて音がしたのは気にしないことにする。ついでに拳大の穴があいたのも。

こうなったら町に散らばっているケモノ達を使って見つけようと思
い、ケモノ達に意識を向けるとそのうちの一匹がすずかの姿をとら
えていた。見つけた!と一瞬喜んだが、すぐにそんな喜びは消し飛
んだ。

「つつつ!」

ケモノが写していた光景はすずかが車の中に連れ込まれている姿だ
った。

< s i d e すずか >

「ハア、ハア、ハア」

見られた

見られてはいけない人に

見られたくない人に

知られたくない人に

私が“人でないこと”を
私が“吸血鬼”であることを

何でもつと気をつけなかったんだらう
何であんなことをしてしまったんだらう
何で今日図書館に来てしまったんだらう
何で

何で

後悔ばかりが浮かんでくる。自分でも思考がめちゃくちゃになって
いるのがわかる。それでも、何で、そう思わずにはいられな
かった。

「えーと……」

舞子ちゃんがそう言ったとき私は何も考えられず、思わず逃げ出
した。私は舞子ちゃんの視線から逃げ出したかったのだ。舞子ちゃん
がおびえた目で見てくるのが怖かったのだ。

「はあ、はあ、はあ」

私はあれから数分以上全力で走り続けた。もう舞子ちゃんを振り切
ったと確信するとようやく止まった。あれだけ走ったのに少しの息
切れで済んだ自分の体のことを考えるとまた少し心が痛んだ気がし
た。

それから数秒もすると頭も少し冷え、あたりを見回した。

「えっと……ここはどこだろう？」

舞子ちゃんから離れるのに必死で、何も考えずにやみくもに走ったために見たことのない場所に出てしまったのだ。

「早く帰らないとお姉ちゃんが心配するね……」

私がそう呟くと

「その心配はいらねえよ。」

返ってくるはずのない返事が返ってきた。

私はびっくりして後ろを振り返ろうとすると、その前に口をふさがれた。

「んぐっ！」

「ふう、こいつがあいつの言う月村家のガキだな。よし、さっさとずらかるぜ……」

男はそう言うと私の体を車の中に押し込んだ。そして、それと同時に私の意識は急速に薄れていった。その時最後に思ったのはお姉ちゃんでもファリンでもなく、舞子ちゃんのことだった。

十二話 崩れる日常（後書き）

ちなみに作者はとら八はやった事ありません

十三話 非日常の世界（前書き）

今回はちょっと短いです。

あと、九月に投稿はできないと思います。

それにしても、いつなのはが出てくるんだ？

十三話 非日常の世界

<side 舞子>

すずかはその後、廃ビルのほうへ連れて行かれた。ケモノ達が窓の外から見張っているので何かあったらすぐにわかるようになっていた。

そして、ボクはと言うといったん家に帰って準備をすることにした。

「……………あ、もしもし石田先生ですか？舞子ですけど。はやての様子はどうですか？……………そうですね、よかったです。それで、はやてのことでちょっとお願いがあるんですけど……………今日は石田先生のところに泊めてもらいたいです。急に友達の家に行くことになって帰りがちょっと遅くなりそうなんです。はやてを遅くまでひとりにしておくのも心配ですし、ボクも友達から今日は泊らないかっていわれているので……………はい、それでははやてのことをよろしくお願いします」

そう言っただけで電話を切ると今度は地下室に向かった。そして、つい先日買ったナイフを手にした。

「まさかこんなに早くつかうはめになるとは思ってたよ。しかも、はやてではなくすずかのためとは予想外だったよ……………。まあ、やることは変わらないんだけどね」

ナイフを服に仕込み終わると次に黒鍵を手にした。

（この短期間ではさすがに複製を作ることはできなかった。だからこれが虎の子の一本になるわけだけど……………いかんせん切り札としては弱いかな。人間ならまだしもすずかの体のことを考えると人外や

異能者であることも考えられる。ここはやはり最悪の場合を想定するべきだろうね。……まあ、ないよりはましか。)

そう思い、黒鍵も服にしまった。

そして最後に、ネロのコートを手にした。

(これを着るのは一種のけじめ。これを着たときボクは平凡な世界を生きる山瀬舞子としてではなく、死徒二十七祖が十位、『ネロ・カオス』となる。再び手に入れた日常を自ら手放すのにはためらいはある。でも……)

「すずかをとりもどす。そのためなら山瀬舞子であることを捨て、化け物となろう」

そして、コートを着た。コートは今の私にとって大きすぎるものであったが、それでも、邪魔には感じなかった。

「さあ、覚悟せよ。我に敵対する者よ。汝がこれより相対するは吸血鬼の中でもなお不死と呼ばれし混沌なり」

私はすぐに廃ビルのすぐそばに轉移した。

(入口に見張りが二人。そして、ケモノ達の五感によるとすずかは最上階の五階一室、その部屋に三人。部屋の前に二人。そのほかには、各階に二人ずつ巡回している……)。

すいぶんと厳重な警備だね。それに、部屋の中にいるうちの一人

は人とは違う感じがする。これは最悪の可能性が当たったということかな。さてどうしたものか……）」

いくら敵の配置がわかったとしてもそれを生かす戦術の知識なんかはありはしない。頼みのネロ・カオスの知識も今は役に立たない。しばらく考えたらいい案が浮かんでくるのかもしれないが、そんな時間はかけられない。

（はあ、もう正面からなるべくすばやく、すべての敵をつぶしながら行くか……）」

そう、作戦ともいえないものを考えるとすぐさま行動に移った。

< s i d e 正面玄関の男1 >

まったく、仕事とはいえ気分がいいもんじゃないな。それにあの依頼者はどことなく気味が悪い。なぜか同じ人間とは思えなかった。

「まったく。さっさと終わらせて帰りたいぜ」

思わず本音が出た。それを聞きとめた隣のやつが眉をひそめて注意した。

「おい、無駄口をたたくな。それにそんな気持ちじゃいざというとき対応できんぞ」

「へいへい」

おれは適当に返事をした。そいつは何か言いたげな顔をしたが無視した。

口ではそんなことを言ったがなんとなく何か起こるだろうなという予感がしていた。それは、依頼者の様子からでもあったが自分の感からでもあった。

(こつこつ嫌な感はよく当たるもんだ)

そう思っていていつもよりも警戒していた。

だが、

それにもかかわらず、

次の瞬間には意識が途切れた

男たちは何が起きたのか、自分がどうなったのかもわからず、

死んだ。

一四話 制圧開始（前書き）

たぶん次は十月になると思います

一四話 制圧開始

<side 舞子>

私の足元には人間“だった”ものが二体転がっている。それは上半身が何かに齧られたかのようになくなっていた。そして、下半身も地面に飲み込まれるように徐々に消えていつている。ほかのやつらの反応を見ても何か変わった行動はしていない。どうやらうまくいったようだ。

私がつた作戦は大したことではなかった。ただ相手が知覚する前に殺す。それだけだった。もっとも、私と同じ行動が可能な者が世界にいるかは知らないが。

私は見張りの頭上から襲ったのだ。その者たちは頭上から敵が来るとは思っていなかったのか、最後まで気付いた様子はなかった。

私がしたのはまずビルの側面に移動することだった。そして巡回の人間が見ていないすきを狙って壁を登り、頭上に移動し、素早く殺す。言葉にするとこれだけだ。だが、ふつうの人間にはまず不可能だろう。私ができるのは吸血鬼の身体能力とあの人の暗殺技術のおかげだ。

「まずは成功か……。それにしても人を殺したというのに罪悪感が全然わいてこないとはね……」

人を殺すのに何のためらいもなかったのだ。いくらネロ・カオスが

何人もの人を殺しているといっても、山瀬舞子が人を殺すのは初めてだというのに。

（これが吸血鬼になるということかな……）

そんなことを少し思っただけで、漠然とした喪失感を覚えたがすぐに頭を切り換えた。

（おそらく定期的に連絡を取っているだろうからいずれ襲撃を受けていることに気付くだろうね。）

それまでになるべく急いで行動してすずかを救出しないといけない。ここからは時間との勝負になる。

「まってね、すずか。すぐに助けるから」

< すずか >

「

待ちしております」

それでは御英断をお

わたしはその声でうつすらと意識が戻ってきた。

「ここは……？」

わたしははつきりとしないう意識のまま寝ている体を起こそうとした。

「……？ えっ！？」

しかし体を動かすことはできず、何だろうと思いついた自分の体を見るとそこには縄でぐるぐる巻きにされているわたしの体があった。

「な、なんで……」

そういつてから、わたしは意識を失った時のことを思い出した。

「おや、ようやくお目覚めですか。さすが月村家のお嬢さんですね、このような状況でも寝ていられるとは。私など緊張しっぱなしで夜も眠れないというのに」

わたしは声の聞こえたほうを向いた。そこには20代ぐらいの男がにやにやと笑みをいやらしい笑みを浮かべながら立っていた。そして、男の後ろにはいかにもプロと言った雰囲気のお坊主があたりを警戒しながら2人立っていた。その男はまるで緊張をしている様子もなく、いまだ混乱しているわたしにそう言った。

わたしは内心ではおびえながらも、何とか表情に出さないように我慢してすぐにその男をにらみつけた。

「ほう、こんな状況でもわたしを睨みつけてきますか。なかなか気丈ですね。しかし、そんな目がいつまでできるかみものです」

男は一瞬笑みを消したが、すぐに元のいやらしい笑みを浮かべた。

「……何が目的ですか？」

「おや、いくらあなたが幼いとはいえ自分が狙われる理由などに思いつくと思えますか？」

「……」

男の言った通りわたしにはだいたい彼の目的が分かっていた。

わたしたちは「夜の一族」と称する吸血鬼で、その中でも月村家は日本国内の「夜の一族」の中でも名家であり、さらにはだいぶおさまったとはいえ遺産を巡った一族間のトラブルまでもある。わたしは詳しいことは聞かされていないけれど家にいれば自然とそういう話を聞く機会が多い。だから、わたしを狙う理由には事欠かない。

それでも聞いたのは、時間を稼ぐのと少しでも恐怖を落ち着けるためだ。だまっているところからわたしがどうなってしまうのかを考えてしまいそうで怖かったのだ。

「……わたしをさらっても無駄です。お姉ちゃんが要求をのむわけがありません」

「ふふふ、それはどうでしょうね……。確かにいくら月村家の当主が身内に甘いといってもちよつとやちよつとのことでは私の要求をのむはずがありません。ですが……」

男はわたしに近づいてきた。そして私の髪をつかんで自分の顔に近

づけた。

「いたっ！」

わたしは思わず痛みで声をげた。男はそれに構わず言った。

「ちょっとやちよつとのことではだめなら、ちょっとやちよつとではないことをすればいいだけです」

「ひっ！」

男は今までのいやらしい笑みではなく、まるで鬼のような壮絶な笑みを浮かべた。わたしはついに恐怖で悲鳴を上げ、震えが止まらなくなつた。

男はわたしの反応に満足したのか髪をはなした。そして、後ろの男たちのほうをむいて話し始めた。

しかし、数分もしないうちに怒鳴り声が聞こえた。

「おい！……くそっ！」

わたしは思わずそつちのほうを向いた。なにやら男たちがどこかと連絡をとっているようだった。でも、何かトラブルが起こつたようだった。

「どうした？」

「ほかのやつらと連絡が取れません」

「なに？全員か？」

「ええ……。おそらく何者かに襲撃されたものと」

「そうか……。しかし、いくらなんでも早すぎるな。」

「そうですね。ですが、そう考えるしか……」

「わかっている」

男たちはそう話しあっていた。わたしは恭也さんが助けに来てくれたんだと思って安堵した。反対に男は苦々しい顔をした。

「失態だな。このおとしまえはどう付けてくれるんだ？」

「申し訳ない」

「謝罪などいい。行動で示せ」

「もちろんだ」

そう言つて、男たち2人は出て行った。後に残ったのはわたしとあの男だけになった。男はいまだに苦々しい表情をしていた。わたしはすっかり安心してしまっていた。

だが、それがまずかったのだらう。そんな顔をしていれば男がいらだつのは当然だった。

「なんだその顔は」

「え？」

「まさか……もう助かったと思っっているわけか？」

そう言っつて男が近づいてきた。その顔にはもう笑みはなく、無表情だった。

わたしはその顔に不吉な感じがして思わず下がろうとしたが、縛られた体ではそれもかなわなかった。

「なるほど……ならば、その考えが誤りであることをその身で知ってもらっしかありませんね」

「い、いや！こないで！」

「別に殺すわけではありませんよ。ただ……体の一部が欠けてしまっつかもしれませんが。なに、些細なことです。我々は丈夫ですからね」

わたしは何とかしてさがろうとしているが、距離は縮むばかりであった。

そしてついあとちょっとで手の届く距離になった。とうとうわたしはこらえきれずに叫んでしまった。

「いやあああああー！」

その瞬間、

ドカン！

ドアが吹き飛んだ

わたしも男も飛んで行ったドアをいったん見ると、次にそのドアがあった場所を見た。そこには、

「やっほー、ぶじ？すずか」

思いもよらない人の姿があった。

一四話 制圧開始（後書き）

しかし魔法はどうなっている・・・

一五話 正義の味方は遅れてやってくる(前書き)

次はできれば来週ぐらい。少なくとも来週までにはなんとか。

一五話 正義の味方は遅れてやってくる

<side 舞子>

あれから制圧を始め、ようやくすずかたちのいる最上階の一階前にたどりついた。敵に見つかからないように慎重に動いていたため、思ったよりも時間をとられた。ケモノ達に任せるとどうしても目立ってしまうから、私自身が動かざるを得なかったのだ。

「こういうとき、ケモノ達は役に立たないよね。まあ、隠密行動をとる吸血鬼っていうのがおかしいんだけどね。ほんと、彼の技術を僅かなりとはいえ覚えていたのはラッキーだったよ」

とは言え、それは頭で理解しているわけではなく体が覚えているだけなので本来の彼と比べると天と地ぐらいの差があるんだろうけど、私やネロはそんな技術は当然のように欠片も持っていないので、ありがたかった。

「……そろそろ向こうも気付き始めるかな？」

なるべく隠密行動をとるようにしたとはいえ、向こうはプロでこっちは身体能力が高いだけのアマチュアに等しい。戦闘では負ける気がしないが、全滅寸前であることに気づいてすずかに何かあったら困る。もう敵も残り少ないし残すところこの階と最上階だけだからここからは最速で駆け抜けたほうがよさそうだ。そう思い、足に力を入れたところで

「か？」

「っ!？」

すぐ近くから声が聞こえた。

あわてて身を隠し、ケモノ達の間から見てみるとそこには

「なにか異常はないか？」

「はっ!問題ありません!」

実行犯たちのリーダーらしき人が部下の人と話していた。

「そうか……」

「どうかなさったのですか？」

「下の階のやつらと連絡が取れなくなった」

「っ!そ、それはもしかして……」

「ああ、どうやら侵入者に襲われたようだ」

……どうやらばれたらしい。これはいよいよもって急がないといけないようだ。

わたしがそう考えている間にも話は進んでいた。

「これからおれたちは中を回って侵入者を見つけ排除する。もう一方のやつらは上に行く階段を守る。幸い、ここに来た時にもう一方の階段はすでに封鎖している。だから上の階に行く経路は一つしか

ない。そこを守ればあとは見つけて殺すだけだ」

「しかし、相手は我々に何も悟らせずに下のやつらを殺した相手ですよ。いくら、隊長と副隊長が強いとはいえ……」

「もしものときは部屋の見張りをしている奴に依頼主だけでもここから逃がす。そのために、おれたちが死んだことが分かる装置を持たせてきた。あいつならうまくやるだろう」

「隊長……わかりました。わたしもお供します！」

「ふっ、当然だ」

………なんか敵さんが壮絶に死亡フラグを立ててるような……まあ、それはそれとして。

「やっかいだね。特に殺しちゃだめってのが」

殺せないってのが私にとって非常に大きな枷であった。どうも、彼の技術は暗殺に特化してあるらしく敵を拘束するといった捕縛術はなかった。私とネロは言わずもがなである。それなら壁を登ればいいのだが、

「そうすると、すずかは守れてもこいつらに逃げられるかもしれない

いしなあ」

おそらく、というか絶対にすずかを助けるときにあのいけすかない男と戦うはめになるだろう。その時乱入してこられても、戦力にはならないとはいえ、やっかいだ。戦力にはならないとはいえ盾にでもなられたら男を逃がしてしまうかもしれない。それは何としても避けたい。

「となると……殺さず、気絶させてすすむしかないかな。加減を間違えないか不安だけど、もうそんなこと言っている時間はないしね」
そう決断し、すぐさま行動にうつった。

<side隊長>

まずいことになったな……。

おれはこれからのことを説明しながらも内心ではもう依頼主を放っておいてでもここから離れたほうがいいのではないかと思いはじめた。それは、部下たちが知らぬ間に連絡が取れなくなっているという状況からの判断でもあったし、おれ自身の経験による判断でもあった。だが、そんなことをすればこれからの仕事に困ることになるだろう。

おれは暗澹たる気持ちになりそうではあったがすぐにそんな考えは消し去った。そんなことを考える余裕などとうに無くなっている。ならば、何とかこの仕事を無事に完遂させるまでだ。そう、改めて決意したときいきなり

「っ！」

背筋に悪寒が走った。

バツと勢いよく悪寒を感じた方へ顔を向けると

「なっ!?!」

そこには少女がすさまじいスピードでこちらに向かってくるのが見えた。

おれは一瞬、そのあまりに現実離れた光景に固まってしまった。慌ててすぐに行動しようとするも、その間にあと数メートルと言ったところまで少女は接近してきていた。

部下がおれの様子に何か言おうとしているが、それを気にする余裕も猶予もなかった。

そして、おれが手に持っていた拳銃を少女に向けると同時に部下の姿が消えた。部下がどうなったのか考える暇もなくすさまじく少女に発砲しようとしたが、少女から何か伸びて拳銃がおれの手ごと無くなった。

おれは反射的に懐に手を伸ばしたがそれよりも少女の手がおれの頭に触れる方がはやかった。そして少女の手が触れた途端、意識を手放した。

< side 舞子 >

「……………何とか成功かな」

私の足元には意識を失って倒れている男がいる。まあ、私が気絶させたんだけど。

気絶させた方法はいたって簡単で男に触って魔力を一気に流し込むだけだ。魔力のない一般人ならその負荷に耐えきれずすぐに意識を失うだろう（もっとも、やりすぎれば廃人になりかねないが）。男も例にもれず意識を失った。そして最初に突き飛ばした男も思いつきり頭をぶつけたようで、頭から血を流して気絶していた。

私はそれを確認するとすぐに次の場所に向かった。

階段にいる二人の男にも同様のことをし、気絶させると最上階に向かった。

そして、ついに最上階にたどりついたところで、

「いやあああああ！」

廊下の突き当たりにある、見張りのいるドアからすずかの悲鳴が聞

こえた。

私はもう一刻の猶予もないとケモノ達にこの階の制圧を任せ、全速で廊下を駆け抜け、見張りをすれ違いざまに食いながら、その勢いのままドアをけとばした。

そして、中にいるすずかが無事なことに安心しながら

「やっぱり、ぶじ？すずか」

そういった。

一五話 正義の味方は遅れてやってくる(後書き)

書いているうちに傭兵さんたちに愛着がわいた。最初は全員死亡する予定だったのに・・・

一六話 戦いの始まり（前書き）

少し遅くなってすみません。つぎは月末ぐらいかな？

一六話 戦いの始まり

<sideすずか>

わたしは何が起こったのかわからなかった。いきなりドアがとんで行ったと思ったら舞子ちゃんが現れたのだ。その姿をこんなところで見るとは思ってもみなかった。そして、わたしは思わずつぶやいていた。

「どうして……?」

「ん?それはここにいる理由のこと?それならすずかを助けに来たから。」

「なんで……」

「うん?」

「なんでわたしのためにきたの!?こんな危険なところに!」

「うーん、それはすずかを助けられない理由になっっていないよ。だれだって妹の友達が危険なめにあっていたら普通助けるものなんじゃないかな?ただそれだけ。」

「それだけって……」

わたしは信じられなかった。舞子ちゃんがここにいることもだけど、それよりも、ここに来た理由に。確かに誰かが危険な目にあっていたらとっさに助けようとするだろう。それが身内の友達ならなおさ

らだ。でもだからと言ってこんなところまで来るわけがない。それに、ここにはわたしをさらってきたひとが……

そこまで考えてようやく気がついた。おそらくこのビルには男たちの仲間たちがいるはずだ。当然、わたしを取り返されないためだろう。それなら舞子ちゃんはどうやってこの部屋まできたんだろう。

わたしが思ったことをこの部屋にいるもう一人の男、わたしをさらわせた張本人も思ったのか、

「……ほかのやつらはどうしました？」

そう言った。舞子ちゃんはその問いにめんどくさそうに答えた。

「さあ？私はここまで急いできたから。来る途中にだれかいたかもしれないけど覚えてないよ。」

「……ほう」

男は睨みつけるように舞子ちゃんを見たが舞子ちゃんは何ともないように言った。

「それよりすずかを返してくれないかな？知り合って間もないけどはやての……妹の友達なんだよね。すずかがいなくなるとはやてが悲しむ。」

「友達……友達ね。く、ははは、これは傑作だ！すずかお嬢様もこの世界になじめているようで安心しました。」

わたしはその男の言葉にいやなものを感じ、とっさにやめるよう叫ぼうとしたがそれは間に合わなかった。

「そう、この人間の世界にね……」

わたしは背中に氷を入れられたような気がした。そして、まだ男の言葉は続いていた。

「ええ、人でない我々が人間の世界で、しかも人間と友達を作るなんて……さぞ苦労したことでしょう。どうでしたか？自分より劣っている者たちと、自分のことを隠しながらつきあう『友達』というのは？さぞ辛い思いをされたことでしょう。」

「っ！そ、そんなこと……！」

「ない……と本当に言い切れるのですか？」

「そ、それは……」

わたしは即座に言い返そうとした。でも、言葉が後に続かなかつた。それはわたし自身心の中では、なのはちゃんやアリサちゃんに隠し事をしていることに後ろめたさを感じていたのかもしれない。

男は返事が出来ないわたしを愉快そうに見ていた。

「それではむしろ友達なぞいない方が良かったのではありませんか？」

「っ！そんなわけない！」

「おや、これは不思議なことを言う。あなたにとって友達とはただ辛い思いをさせるだけの存在なのでしょう？ならばいつそ友達なぞいなければいい。そうすれば辛い思いをすることはありません。それに……」

男は私の顔をみてにやっと笑った。

「あなたも本当は友達というものなんかほしくなかったのでしょうか？」

「っ！」

その言葉はわたしの心の暗い部分を刺激した。それはなのはちゃんやアリサちゃんに会う前の私のことにあまりにも当てはまっていた。平時ならそれでもすぐに言い返しただろうが、今の状態ではその言葉に言い返すことができなかった。

男は反応できないわたしの様子を見て満足そうな顔を見ると、それまで黙っていた舞子ちゃんのほうを向いた。

「そういうわけです。すぐかお嬢様は友達がいららないようですのでそちらはお帰りください。今でしたらあなたがしたことは見逃してあげます。」

舞子ちゃんのはしばし何の反応も見せなかったがいまだに動けないわたしを見、次に男を見、最後にもう一度わたしを見るとため息をついた。

「ふう……困ったもんだ。」

その言葉に男は訝しげな表情をした。でも、舞子ちゃんはそれを気にすることなく言った。

「さつきから聞いていれば人間じゃないだの友達がいららないだの、私は別にそんな事を聞きに来たわけじゃないんだよ。私がしたいのはすずかを助けることだけ。そういうことはあとで聞くよ。だからさっさとすずかを返して。」

わたしはハツとして舞子ちゃんの方を見た。舞子ちゃんは最後に見たときと変わらずめんどくさそうな顔をしていた。男はその態度にいらついたのか笑みが少し崩れた。

「聞いていたのですか？すずかお嬢様は友達がいらないと……」

「そっちこそきいてた？すずかを助けるって。……簡単に言うとなんはやてがすずかがいないと悲しむからすずかの意味とは関係なくすずかを取り返すってこと。極論を言うとな、すずかの意味はどうでもいいの。私を取り返したいから取り返す。それだけ。」

その言葉に男はもちろんわたしも絶句した。

「まあ、そういうわけですずかを助けるから。友達に言いたいことがあつたら帰ってからしつかり話しあつてね。……それにだれしもが自分以外には言えない秘密を持っているものだよ。」

わたしがいまだ絶句している中、舞子ちゃんはそんなことを言った。

「そう、友達だけじゃなく妹にも言えない秘密がね……」

そう言った舞子ちゃん表情はどこか寂しそうだった。
わたしがどういうことか尋ねようとしたとき、もはや表情すら消え
さった男が言い放った。

「……へえ？ですがどうやって私からすずかお嬢様を取り返すので
すか？」

「ん？それは普通にあなたをたおして。」

それを聞いて男は堪えきれないといった風に笑い出した。

「くっ、くく、くは、ははは。これはこれはまさかあなたのような
少女にこんなことを言われるとは思っていませんでしたよ。私を
倒す？あなたが？くはは、ありえません。たとえあなたが下のやつ
らを倒していたとしてもね。」

「なぜ？」

「それは私がやつらよりも強い吸血鬼だからですよ！その私をあな
たが？くくく、私を笑い死にさせる気ですか？」

その通りだった。男はまがりなりにも夜の一族の血をひく男。そん
な彼にただでさえ私と同じぐらいの舞子ちゃんが勝てるはずがない。
男はいまだに笑っている様子だったが、舞子ちゃんはそれを見て呆
れたように呟いた。

「まったく、人の本質を見ずに外見だけで物事を判断するとは……
所詮はまがい物の吸血鬼だね。」

「……なんですって。」

まがい物と舞子ちゃんが言った時、男の顔からすべての感情が消えた。

「聞こえなかった？まがい物と言ったんだよ。」

「……………私がまがい物だと!!」

そついった男の顔にはすさまじい憎悪と怒りの色があった。

「貴様……………!!」

「何？もしかして本当のことを言われて怒ったの？」

「きさまあああああ!!」

男の怒気は向けられていないわたしでさえ怯えてしまうものだった。舞子ちゃんは気にも留めていないようだった。

「殺す……………殺してやるぞ。」

「ふーん。私としてはそつちの方が手っ取り早くていいんだけどね。それに……………私もすずかをさらったことに少しだけ頭に來ているんだ。だから……………」

「「死ね」」

そして戦い、いや殺し合いが始まった。

一六話 戦いの始まり（後書き）

モブの名前は基本出しません。

十七話 吸血鬼の戦い(上) (前書き)

遅れてすみません。次はなるべく早くあげたいと思います。

十七話 吸血鬼の戦い(上)

<side 舞子>

「「死ね」」

その直後互いに向かって突撃した。私はこのからだの身体能力があれば先手を取れるだろうという考えからだだったが、

「死ねええ！」

「っ！」

逆に先手を取られてしまった。男の攻撃はただのパンチだったが、私以上の身体能力から繰り出されるパンチはまともに食らえば人間なら確実に殺せる威力をもっていた。とっさにケモノを出そうとしたが、さすががいることを思い出して慌てて短刀で受け止めようとする。

「はあ！」

「つく……うわっ!？」

だが、思った以上のスピードできたためにつまぐ受け止めることができなかった。そのうえ、受け止めた瞬間にすさまじい衝撃が短刀にはしり、そのまま弾き飛ばされてしまう。危うく地面に激突しそうになるがぎりぎりで受け身を取った。

すぐに立ち上がるうとしたが右手に違和感を感じた。どうやら手首がやられてしまったようだ。すぐさまその傷を治し、顔を上げると

男が追撃してくるのが目に入った。私は立ち上がらずに床を転がる。すると、私がさっきまでいたところに男のパンチが突き刺さった。

……そう、'突き刺さった'のだ。

ドン！という音がした。私は男の方をすぐに見たいと思ったがまずは体勢を立て直すのが先だと考え、立ち上がりつつも男から離れるようにジャンプする。再び男が追撃してくるかとも警戒したが、追撃はなかった。そしてある程度離れるとすぐに男の方を見る。そしてそこには思った通り、いや思った以上のことが起こっていた。

男はまだ拳を振りおろした体制のまままで止まっている。だが、肝心の拳は私の目には見えなかった。あるであろう場所はわかる。それは堅いコンクリートでできた床の中だ。男のパンチは床にぶつかっただけでは止まらず、コンクリートを貫いてその中に埋まっていたのだ。

(……っ！？なんて威力。私でもコンクリートを砕くことはできても貫くことはできないのに……。すずかに自分本来の戦い方を見せるわけにはいかない以上、距離を取って戦った方がいいかもしれない。……ふう、投擲用のナイフを持ってきていて良かった。)

私は思考を続けながらナイフの準備をしていると男が話しかけてきた。

「さて……まだやりますか、お嬢さん？確かにあなたもここまでたどり着くだけの力量はあるようですが……私には到底及びません。諦めて降伏してはどうですか？頑張つて命乞いしたら命だけは助かるかもしれませんよ？」

さっきの戦闘でいくら冷静さを取り戻したのか、口調は元に戻っていた。だが、目はいまだに暗い怒りの色が見える。私はさらに男を怒らせるよにしゃべった。

「それはこつちのセリフ。確かに力だけは人並み以上はあるみたいだけど……逆にいえばその程度しかない。そんなんじゃないとて本物とはいえない。まがい物程度で私にかなうわけがないのだから、頑張って命乞いをしたらどう？ 命だけは助かるかもしれないよ。」

「……………」

男は何も返事をしなかった。だが、空気が張り詰めていくのを感じる。

「うん？ …… ああ、まがい物って言われたら傷つくよね。自分は本物だからってそんな言い方はなかったね。ごめんごめん。次から気をつける……………」

私の言葉が言い終わるか否か、男が今度は何も話さず突っ込んできた。私は予めそうなる予想していたので今回は落ち着いて行動できた。

突っ込んでくる男に向かって片手に3本ずつ、計6本のナイフを投げる。ナイフは微妙にタイミングをずらして男に向かう。スピードはそれなりではあったが男の速さも考えると、男にとってすさまじい速度で向かってくるように感じるだろう。だが、男は難なくはじいて勢いを落とさずに向かって来ようとする。そこに再び間を置かずに投げたナイフが襲う。

「ちっ」

男が舌打ちをする。さすがに連続で投げられたナイフをはじくためには速度を落とさざるをえなかったのだ。私はそこに何度も連続でナイフを投げ続ける。男は簡単にそれをはじくが、攻め込めないでいる。横に逃げようにも絶妙なタイミングで投げられたナイフに邪魔をされて動けずにいる。私は私で、ナイフを投げ続けながら黒鍵を打ち込む隙を探っているがなかなか見つからない。このままではいずれ、手持ちのナイフが尽きてしまう。何とかしようにもする余裕はなかった。

しばらくこう着状態が続いたが、ついに崩れた。

（くっ！もう、ナイフが無くなる！）

ナイフの残りがほとんど無くなってしまったのだ。とはいえ、その事が男にばれたら不利な接近戦を挑まれてしまう。そうなれば、切り札を切らなければ勝ち目はないだろう。でも、あれはさすがの前では使いたくない。なら……

「せい！」

「っ！？」

残り後数本というところでこちらから攻めに転じた。すぐに短刀に持ちかえ、地を這うように走る。一瞬で男に近接すると、勢いよく短刀を振り上げる！男はいきなりの攻撃に意表をつかれたものの、なんとか防ぐことに成功する。しかし、私は振り上げた短刀を今度は勢いよく振り下ろす！

「くっ！」

男は傷こそ負わなかったものの、体制が崩れて無防備になってしまった。そこにすかさず、私は蹴を入れる。

「蹴り穿つ！」

「ゴツ！」

私の蹴は男の頭に入った。普通ならそれだけで死んでもおかしくない威力だったが、脳震盪を起こしたただけのようだ。だが、それは戦闘においては致命的な隙だった。

ブスッ

私はその隙に短刀を胸に目掛けて振り下ろした。

「ッ！」

「ギヤアアアアア！？」

男はたまらず悲鳴を上げる。そして、狂ったように暴れ出した。これには私も慌てる。

（くう！いくら急所を避けたとはいえ、胸に短刀が刺さっているのになんて暴れ様。……あっ！すずかは！？）

慌ててすずかを探すと、もう少して男の攻撃範囲に入りそうなところにいる。

「すずか！早くそこから逃げて！」

「ま、舞子ちゃん。……た、立てなくて……」

どうやらすずかはや腰が抜けて動けなくなつたようだ。慌ててすずかの方へ行こうとするが運悪く、男もすずかの方へ近づいている。このままでは先に男がたどり着いてしまう！

私はついに黒鍵を手を取った。そして、男目がけて投げた。

グサツ！

「ガアアアアアー……！？」

私の投げた黒鍵は男の腹部に刺さつた。男は断末魔を上げるとついに倒れた。私はしばらく男の様子を見ていたが、動く気配はないので安心してすずかのところに行つた。

「すずか、大丈夫だった？」

「ッ！だ、大丈夫……」

すずかはそう言ったが、その目には恐怖の色があつた。私は予想していたとはいえ、少し悲しくなつた。すずかもそれに気づいたのか何か言おうとしたが私はそれを遮つた。

「まあ、すずかが無事でよかったよ。それで、これからどうするの？」

「えつと……たぶんもうすぐ迎えが来てくれると思つから。」

「そっか……よかったね。」

「しゅ……」

> side すぐか<

(どろしよつ……)

心の中はそれでいっぱいだった。

舞子ちゃんがあの人を倒したときいくら敵とはいえ、人を殺してもまったく動揺していない舞子ちゃんに恐怖を覚えてしまったのだ。元はいえばわたしのせいであんなことになったというのに。舞子ちゃんが私の顔を見て悲しそうな表情をしたときにそのことに気づき、すぐにそんなことないって言おうとしたんだけどそれも舞子ちゃんに遮られてしまった。

その後も何度か話しかけようとするが結局、出来ずにいた。でもとうとう心を決め舞子ちゃんと話そうとする。

「ま、舞子ちゃん！」

「お、おう!？」

いきなり大声で話しかけられたことでびっくりしたのか声が裏返っていた。でも、わたしはそんなことを気にしている余裕はなく、そ

のまま話を続ける。

「あ、あのね……えと……ッ!？」

舞子ちゃんの方を向くと倒れている男が目に入った。そして、その男が一瞬動いたように見えたのだ。それを見てわたしは声に鳴らない悲鳴を上げた。わたしは急いで不思議そうな顔をしている舞子ちゃんに知らせようとした。だが……

「ゲフツ!」

「え……?」

舞子ちゃんの胸から手が生えていた。わたしは何が起こったのかわからなかった。でも、手が引き抜かれ、舞子ちゃんが重力で地面に崩れ落ちたとき何が起こったかを理解した。そして、堪らず悲鳴を上げた。

「い、いやああああ!?!」

十七話 吸血鬼の戦い(上) (後書き)

少し正確悪く書きすぎたかね？

十八話 吸血鬼の戦い(中) (前書き)

一月中は忙しく、投稿できなくてすいませんでした。その分、今月中にもう一話投稿できるよう頑張ります。あと、今回はちょっと中途半端なところで切っています。

十八話 吸血鬼の戦い(中)

sideすずか

「ゲフッ！」

「え………？」

舞子ちゃんの声とともに彼女の胸から手が生えた。わたしはそれを茫然と見ている。

ゴホツという音が舞子ちゃんの口から洩れ、いっしょに血が吐き出された。その血がわたしの顔にかかる。

「あ、え………？」

頭の中が真っ白になり、言葉にならない言葉が口から出た。

手が胸から引き抜かれると舞子ちゃんの体は重力に従い、地面に崩れ落ちた。そして真っ赤な血が地面に広がった。

「い、いやあああああ……！！！」

わたしは悲鳴を上げた。なんで、どうして、そんなことだけが頭に浮かぶ。答えなど分かり切っているのに回答が出てこない。出してしまつと舞子ちゃんが んだことを認めてしまいそうで……

「はあ………はあ、よくもここまで手間取らせてくれたなっ！しかもこの姿までとらせよって！………だが、ついに殺したぞ！」

その声でようやく舞子ちゃんのすぐ後ろに立っている男に目がいく。

男はぼろぼろだった。目を血走らせ、胸と腹部からは血が流れている。だが、胸の血は止まり始めているのに対して腹部からは止まる様子もなく血が流れ出している。このままでは例え夜の一族であっても死んでしまいかねないほどだ。しかし、何よりも目に付いたのは右腕がまるで獣のようになっていていることだ。

「あ、あなたが舞子ちゃんを……！」

わたしの声で男はようやく視線をわたしに向ける。

「ああ……あなたを人質に取るのがメインでしたね。このクソガキのせいですっかり忘れていましたよ」

そう言つて男は舞子ちゃんの頭を踏みつけた。

「ええ……こいつのせいで私の計画はめちゃくちゃだ。それに、もはや腹部の傷は決して治ることはないでしょう。……何もかもこいつのっ！せいであつ！」

「っ！やめて！舞子ちゃんをもう傷つけないで！」

その言葉で男は再びわたしのほうを向いた。そして、馬鹿にしたようにいった。

「なに被害者面して言っているんですか？」

「え……」

「このガキが死んだのは、元はと言えばあなたのせいでしょう」

「っ!？」

「あなたを助けに来たからこの女はこんな危険な場所まで来たのでしょう?そして、返り討ちにあつてこうしてくたばっている」

「そ、それは……」

「私のせいだとも?なるほど確かにそうなのかもしれませんが。ですが、この女はあなたのためにここに来たというのは事実です。そして……」

男は舞子ちゃんを見降ろした。そして、わたしに止めとなる言葉を言い放つ。

「死んだということもね」

「あ、あ……」

舞子ちゃんが死んだ。

それはさつきから目をそらしていることだった。なぜなら、その事実はわたしにとつてあまりにも重すぎるから。だが、男によつてついに認めてしまった。舞子ちゃんが死んだということ。

そしてそれを認めた瞬間、目の前が真っ暗になり意識が遠のいた。目の前で友達が死んだという事実に関が耐えきれなかったのだ。

意識が遠のく中、わたしは思った。

どうかこれが夢でありますように

と。

> side 舞子<

「ゲフツ！」

私の口からそんな声が漏れた。すると、いきなり呼吸ができなくなりせき込む。何かが身体から引き抜かれると身体がかってに倒れていき、ついに床とぶつかった。そして、ようやく何が起こったのかを理解した。

（ああなるほど、あいつに胸を貫かれたのか。）

胸にはポツカリと穴が開いていた。どうやら、あまりにも近距離からだったためケモノ達が出る暇もなく攻撃されたらしい。これは黒鍵が刺さった時点で死んだと思い、不用意に近づいた私のミスだった。ここはあくまで異世界なのだから前の世界の武器が同じように通じるとは考えるべきではなかった。

とはいえ、私はそれほど深刻に考えていなかった。混沌に近い私にとって肉体の損傷など無問題であるからだ。しいて言えばさすがにショッキングな映像を見せてしまったことぐらいだ。それには少々申し訳なく思いながら、すぐに肉体を再生して男を今度こそ殺そうとしたときだった。

ドクッ
ドクッ
ドクッ
ドクッ
ドクッ

(なっ!!???)

ケモノ達がいきなり暴れだした。

(なんで!!???)

いきなりの出来事に混乱しながらも、このままではさすがにも被害が及ぶと思い、慌ててケモノ達を抑えようとする。

(う……くっ!?)

だが、予想以上にケモノ達が手強く、気を抜くとすぐにも勝手に暴れだしそうである。

(なんで!?!以前と違って私の意識もはっきりしているのに!?!どうして言うことを聞かない!?!?)

なんとか抑え込もうと悪戦苦闘しているときだった。

『ふむ、どしどしやうきになっていくようだな』

そんな声が聞こえたのは。

十八話 吸血鬼の戦い(中) (後書き)

作者の脳内設定では、教授はけっこう親ばか

一九話 ネロ・カオス（前書き）

前回の後半とくつつけました。

次が吸血鬼の戦い（下）になります。

一九話 ネロ・カオス

> side 舞子<

えっと思ったとたんにいきなり別の場所に立っていた。いや、立っているというのは間違いかもしれない。なぜならそこは地面も天井も何もない、すべてが闇でできた場所だったからだ。

「否、ここは闇ではなく混沌だ」

ボクがそんなことを考えていると後ろから声をかけられた。その声を聞いてはじかれたように後ろを振り向く。

そこには一人の大きなコートを着た男がいた。そして、そのコートはボクが持っているものと全く同じだった。

「あなたは……」

「私か……私の名はネロ・カオス。いや、その名は貴様に受け継がれたのだからフォアブロ・ロワインと言った方が適切だろう」

「っ！あなたが……。なら、ボクを殺したのも……！」

「そうだ。私だ」

「っ……！」

その言葉を聞いた瞬間、飛びかかった。だが、そんな単純な攻撃は難なくかわされる。その上、かわされた拍子に無防備の背中を殴られ、倒れてしまう。しかしすぐさま起き上がり、フォアブロ・ロワ

インを憎しみのこもった眼で睨みつけた。やつはそんなボクの眼を無感情にじつと見つめていた。そしてしばらくして話し出した。

「……気はすんだか？」

「っ！そんなわけないでだろ！お前のせいでボクは死んだんだ！」

「そうか。だが、私は貴様を殺したことに何の感情も抱いてはいない」

「っっ！」

その言葉に目の前が真っ赤になった。

「それに、今は他にやるべきことがあるのではないか？」

ボクはハツとする。このままではケモノ達がすずかを殺してしまう。それだけは避けないといけない。そのことに思い至り、少しだけ頭が冷えた。そして、なぜフォアブロー・ロワインがここにいるのかは分からないが、彼の役割については理解した。

「……あなたならこの状態をなんとかできるの？」

「無論だ」

いまだフォアブロー・ロワインに対して強い憎しみがあるものの、この時ばかりはそんなことも忘れて助けを求めた。

「なら方法を教えて！」

「……ふむ、まあいいだろう。そのために私はここにいるといっても過言ではないのだからな」

そう言うと彼は私に近づいてきた。そして、手を伸ばせば届く位置まで近寄ると止まって話し出した。

「まずはこの空間のことを話そう」

「そんなことより……っ！」

「落ち着くがいい、これは必要なことだ。それにこの空間でいくら時間をかけようと現実では時間は進んでいない」

「……」

そう言われてしまえば反論することもできず、おとなしく黙って聞くことにした。

「この空間は言ってしまえば貴様の固有結界『獣王の巢』の中だ。ゆえに私は貴様が持っているイメージ通りの姿であり、貴様も元の姿で存在している」

その言葉でようやく今の姿に気づいた。今の外見は20歳代の女性、要するに元の世界の姿だったのだ。

「話を続ける。そしてなぜこの世界にいるのかというと、私が呼んだからだ」

「は……？そんなことができるの？」

にわかには信じられなかった。いくら元の体の持ち主だからといって今の持ち主であるボクを、ボクの固有結界に連れ込めるなんて考えられなかった。

「普通なら不可能だ。だが、いくつかの奇跡が重なって今なら可能になったのだ」

「奇跡？」

「そうだ。まず一つ、分かっているだろうが固有結界『獣王の巢』はもともとは私のものだ」

「それぐらいわかってる」

「つまり、本来は貴様が使えるものではないのだ」

「はい？そんなこと言われても実際使えてるわけで……」

「そこが奇跡だ。元来、固有結界は術者の心象世界の体現ゆえに個人個人でその能力の概要は大きく異なるものだ。だが我らは肉体が固有結界となつているために私でなくとも、私の肉体を受け継いだ貴様なら固有結界が使えたのだ。とはいえ、使えなかった可能性も十分にあつたがな。むしろそちらの方がはるかに可能性としては高いだろう」

「……もし使えてなかったら？」

「その時はすぐさま肉体が消えてなくなるだけだ。……話を戻そう。つまり今の貴様は私の固有結界を借りているだけにすぎん。我が力を完全には制御しきれていないのだ」

「それがケモノ達が暴走している理由？」

「そうだ。そして、貴様が未熟ゆえに私がこうして貴様と話ができているのだ」

「……どういうこと？」

「……少しは考えたらどうだ？まあ、いい。ここにもう一つ奇跡がある。‘私’と言う意識が残っていたことだ」

「うん？ここは混沌なんだからあなたの意識も含んでいるはずじゃ？」

「無論含まれてはいる。だが、それが貴様のように一つの意志をもつまでになることはまずありえん。そういう意味では貴様という意志が存在しているということがすでに奇跡の産物だ。……おそらく私がやつに殺される直前に食べたということと、真祖がやつの手当のために我が肉体を使ったときに何か手違いがあったためであるうが。力が弱まっているとはいえ真祖は真祖、我々が奇跡と思うようなことですらたやすいか。」

「……まあ、それは置いておこう。混沌の中で一つの意志をもつことすら奇跡と呼ぶにふさわしいのに私は本来の人間としての意識や知性も薄れているからな、いつ意識が混沌と同化してもおかしくない。だが、幸運にもこうして意識を持つことができた。意識を持たたならあとは簡単よ。元はといえば私の体なのだからな。未熟な貴様をこうしてこの空間に引きずりこむぐらいたやすい」

「……ならなんで今までそうしなかった？」

「ふむ……単に私がさつき意識を持ったからだ」

「へ？」

「どうやらケモノ達が暴走して多くのケモノを放出しようとするさいに私も一緒に生み出されたようだ。私はケモノ達の集合体として存在していたからな。それゆえだろう」

「そう……あなたがなぜここにいるのかは分かった。私が未熟なせいでケモノ達が暴走しているのも。でもどうやってこれを止めるのかは聞いていない」

「なに、簡単なことだ。私の固有結界を取り込み、自分の固有結界にしてしまえばいい」

「え……」

「そして、そのために私はこうして貴様を呼んだ。正式に貴様を死徒二十七祖が十位『ネロ・カオス』として継がせるために。そして

……

我が目的、真なる混沌を生み出すために」

「真、なる混沌……」

「そうだ。もはや貴様は私を超えたのだ。」

先ほど未熟ゆえに私の固有結界を使えないと言ったな。確かに貴様は固有結界を使うには未熟だ。だが、ケモノ達が暴走したのは単に貴様が未熟なだけではない。私の固有結界が新たに貴様の固有結界として生まれ変わろうとしている、その影響で因子であるケモノ達が活性化しているからでもある」

「……」

「つまり……」

貴様の固有結界こそ、私がすべてをかけて求めてきた混沌に他ならない」

……… ボクは何て言ったらいいか分からなかった。この人のようにボクは混沌を追い求めてきたわけではないのだ。ただ、いつの間にかこんな体を手に入れてしまっただけだ。だから何も言葉を返すことができなかった。

フォアブロ・ロワインはそんなボクを無視して、見えていないかのように話し続ける。それはどこか、子供のように熱に浮かされているしゃべりだった。

「そして私が、貴様が真なる混沌にいたるための最後の鍵だ。そう、この私によってついに、ついに混沌は完成する！原初の世界が！この世の始まりが！ついに完成するのだ！！！」

もはや、ボクなど眼中にないのだろう。フォアブロ・ロワインは、原初の世界だけを追求した男は狂気に満ちた笑みを浮かべ、叫んだ。そして狂ったように笑い出す。だれにも邪魔されることなく延々と。

しばらくして、ようやく笑いが止まった。

「ふう……すまない。年甲斐にもなく浮かれてしまった。もう大丈夫だ」

「……」

「まあ、私のことはしばらく置いておこう。それよりこれからのことだが……」

「っ！そうだよ！これからボクはどうなるの？」

それが最も心配だった。話を聞いているとボクが混沌として完成しつつあるということは把握したが、完成した後にボクの身体や精神がどうなるかはまったく分からない。

「ふむ、完成した後のことか……そればかりは私にも分からんな。身体ごと世界から消えるのかもしれないし、そのまま残るのかもしれない。だが分かっているのは、少なくとも今のままでは何も解決しないということだ」

「っ……！」

「さて、どうするかね？混沌として完成するか、それともこのまま何もせずにあの子供を見捨てるか。貴様はどちらを選ぶ？」

「……」

しばらく場が沈黙に満ちた。

そして、ようやくボクは呟いた。

「……その言い方は卑怯だ」

「ふん？」

「そんな言い方されたら、もう覚悟を決めるしかないじゃないか」

「では……？」

「決めたよ。ボクは混沌となるう」

「そうか、それは良かった。とはいえ……例え断つていても無理やり行ったがな」

「……へ！？それじゃあ最初から選択肢はなかったわけ！？」

「あつたではないか。無理やり混沌になるというのと、自ら混沌になるというのが。こちらとしては協力してくれた方が成功率は上がるので助かったがな」

「むうー！」

ボクはなんとなく釈然としなかったがやつはお構いなしに話を進め

た。

「さて、その方法だが……」

「あ、そういえば聞いていなかったね」

「簡単なことだ。私を喰らえ」

「……もう一度言ってくれろ？」

「私を喰らえ」

「……どういふことか説明してくれるよね？」

「しろと言われればな。だが、本当に単純な理由だ。貴様は固有結界を制御する方法を知らないからだ。これは知識ではなく本能の問題だからな。ゆえに私を喰らって取り込めばその方法も本能で理解できるだろう。もとは私の物だからな」

「……あなたはそれでいいの？」

「どういふことかね？」

「せっかく混沌を見れるのにボクに喰われたら……」

「ふむ、どうやら勘違いをしているようだな」

「え……？」

「貴様が混沌を創るのではない貴様が混沌となるのだ。つまり貴様が私を取り込んだその瞬間、混沌は完成する。そして、私はその一瞬だけを追い求めてきたのだ」

「でも、ボクに取り込まれたら見れるかどうかなんて……」

「確かに。だがこれが最も確率が高いのだ」

「……」

「ふむ……？もしかして私の心配でもしたのかね？」

「だ、だれがっ！」

「それなら気にすることは無い。所詮私は貴様を殺した者にすぎん。私のことなど気にする必要すら無い。これはただの取引だ。貴様は彼女を助ける方法を求め、私は混沌を見る方法を求めた。それだけだ」

「……」

ボクは何も言えなかった。彼はもはや止まらないとわかったから。だからもう彼の望み通りにしてあげるしかなかった。

「……どうやってあなたを喰らうの？」

「ただ、私を見て喰らえと念じるだけでいい」

「…………そう」

ボクはそれだけ言うとフォアブロ・ロワインの身体がすべて見えるところまで下がった。

「…………最後に言うことはない？」

「ふむ…………では人生の先輩として一つ言っておこう」

「何？」

「傲慢に生きるがいい。人の都合など気にせず、己のためだけに生きるがいい」

「……………わかった」

ボクはようやく本当の意味で覚悟を決めた。

そしてフォアブロ・ロワインを見、ついに言った。

『喰え』

その言葉を言うと彼の身体が周囲の闇に取り込まれるように消えていく。最後にボクもフォアブロ・ロワインに向けて言った。

「…………さよなら」

言い終わるとともに身体が完全に消えた。
消える直前、やつが笑った気がした。

二十話 吸血鬼の戦い(下) (前書き)

今回でようやく一章の山は越えました。あと数話で次の章、つまりは無印に行けそうです。

二十話 吸血鬼の戦い(下)

>side男<

「…………ふん、気絶したか。」

月村すずかが気絶したのを確認する。

…………どうやら本当に気絶しているようだ。私はそれで、ようやく右手を元に戻した。

「手間が省けた。これから移動するのに暴れられては面倒だからな。」

ひとまず、心配の種がひとつ消えたことに安堵した。先ほどはああ言ったが、実際にこの娘を傷つけるつもりはない。もし、傷つけたとすれば当主も本気で私を殺しに来るだろう。さすがに本気になった月村家を敵に回して勝てるとは思っていない。だから、なるべくすばやく事を進めるつもりだったのだが……

「まさかこんな邪魔が入るとは……………」

そう毒づいて今一度、乱入者に視線を向けた。そいつはすでにこと切れてはいるが、こんな少女に邪魔されたという事実でプライドはボロボロだった。

もう一度、今度は頭を踏みつぶしてやろうかとも思ったが、そんなことをしても傷ついたプライドは回復しないので思いとどまる。それに今は時間との勝負だった。雇った傭兵どもが全滅した以上、私自身がこれからのことをしなければならぬのだから余計なことをしている時間はなかった。

「クソッ！」

もう一度毒づいてから月村すずかを運ぼうとした、そのときだった。

「ッ!？」

ふと悪寒を感じとつさに後ろへ飛んだ。

すると次の瞬間、一匹の狼が私のいた空間に噛み付いていた。あと少し遅れていたら食われていただろう。背筋に冷たいものが走る。そして狼は私と月村すずかの間に入り「グルルル……」と威嚇してくる。

どこからやってきた、と思っているところ。

「うーん、外れたか。まあ、あれで決まるとは思わなかったけど。」

166

そんな声が聞こえた。

私はまさかと思い、狼に注意しながら声のしたほうを向くとそこには殺したはずの少女が何もなかったように立っていた。

> s i d e 舞子 <

意識が現実へと戻ってくる。

私はまだぼんやりとしていたが少しするとようやく頭が回るようになり、本当に現実世界に戻ってこれたことを実感する。そのとき、

ハッと思いだした。

(そうだ! すすかは!?)

慌てて周囲を確認するとちょうど男が運ぼうとしているところだった。私は反射的にケモノで男を攻撃する。

男は寸前のところでそれをかわす。私はすすかを男から守るようにケモノを位置し、意識をこちらに向けさせるように言葉を放つ。

「うーん、外れたか。まあ、あれで決まるとは思わなかったけど。」

その言葉で男はゆっくりとこちらを見、そして私がそこに立っているのが信じられないという様子で言った。

「ば、ばかな……お前はさっき私が殺したはず!?’

「……すごいテンプレなセリフだね。まあそれは置いて」

私はニヤリと笑う。

「残念ながら私はあの程度では死なないよ」

「そんな馬鹿な!?’ 心臓をつぶしたんだぞ! 例え純血種であっても致命傷のはずだ!」

「残念ながら私は純血ではないよ。そうだね……私は祖だ」

「祖だと……?’

男は言葉の意味がわからないといったような声を上げた。

「そう……はるか昔に生まれ、強大な力を持った吸血鬼達。二十七祖が十位、ネロ・カオスの名をもつもの。二十七祖の中においてすら不死と呼ばれた私が心臓や頭をつぶされた程度で死ぬものか」

「二十七祖だと……そんなもの聞いたことがない！」

「別に信じてもらう必要はないよ。ただ、すずかを置いていってくれればね」

男をぎろりとにらんで言った

「ただ……もしそれでも連れて行くこととするのなら……」

ズルリ、ズルリと足元からケモノ達が這い出てくる。それはとどまるところを知らず、とうとう男の周り以外がすべてケモノ達で埋まったところでようやく止まる。

その状況に男の顔は驚愕で染まっている。そして、ついに私はケモノ達に命令を下す。

「力づくでも思い知らせてやろう！！」

> side 男 <

男の驚愕が収まる前にケモノ達が殺到していく。

まず前方から牛が突進する。男は反射的に横によけて交わした。だが、すぐ新たに虎が腕を振り下ろす。それを身をひねることかわし、殴り飛ばす。それにほっとする間もなく頭上に悪寒を感じて転がってその場を離れる。次の瞬間、そこにカラスがくちばしを突き立てていた。男はそれを何とか避けたが体勢が崩れてしまった。そこに魚のようなものが足にかみついた。男に激痛が走る。魚には牙のような歯が生えておりそれが骨まで到達していたのだ。魚はすぐに足を床にたたきつけることでつぶしたが、すぐに次のケモノが迫ってくる。痛みを我慢して立ち上がり、それを迎撃する。だが倒しても倒してもケモノ達が減ることはなく次々に襲いかかってくる。手を休めることもできず、男はもはや本能で対応していた。

> s i d e 舞子 <

私は男をケモノ達に任せるとすずかを確保しに行った。男はケモノ達の攻撃を防ぐのに精一杯のようで私の動きを邪魔されることはなかった。

「すずか、大丈夫!？」

呼びかけても反応がないので一瞬焦ったが、様子を調べてみると消耗していること以外はいたって無事のようなのだ。

私はほっと息をついた。気がつくとすずかが気絶して男に運ばれそうになっていたのだから、何かされたのかと心配していたのだ。

ひと先ず、すずかが無事なようなので私は男の方を向いた。男はあつたときの落ち着いた様子が嘘のように手当たり次第といった風に、ケモノのように戦っていた。

「へー予想以上に頑張ってるね。まさかここまでケモノ達を倒しているとは……。でも」

ゴポッ

「残念ながらいくら倒そうと無駄なんだけどね」

ズズズズズ……

また新たなケモノ達が混沌より出る。そして男に向かっていく。もはや男の死は決定したようなものだった。男にできるのはただ死に至るまでの時間を延ばすことだけだった。唯一助けることができるのは私だけであり、私は当然助けるつもりはなかった。それどころか、さらにケモノ達を増やそうとした。だが、

「……………う、ん」

倒れているすずかの口から声が漏れた。どうやら目覚めようとしているようだ。私はついすずかの方を見てしまった。そして、その行動はケモノ達の攻撃を一瞬止める結果につながってしまった。その瞬間、その僅かなすきをほとんど本能で戦っている男は見逃さなかった。一直線に窓まで身体が傷つくのも構わず駆け抜ける。慌ててケモノ達に指示を出す時すでに遅く、男はそのまま窓から飛び降りた。私も鳥類を窓から飛び立たしてあとを追わせた。

「はあ……………詰めが甘かった。まあ、見失うことはないだろうけど。」

……ま、それは置いて

私は今にも目覚めそうなすずに目をおとした。瞼がピクピクと動きすずかはゆっくりと目を開けた。

「……………まいちゃん？」

「うん。まあ……………その……………」

私はいったんそこで言葉を切る。そしてにっこりと笑う。

「おはよう、すずか」

二十一話 Aftercare (前書き)

忙しくて予想以上に遅れてしまいました。次もこのくらい遅れるかも……

今回はサブタイが浮かばなくて困った。

二十一話 Aftercare

>sideすずか<

「……………まいこちゃん？」

目が覚めると目の前に舞子ちゃんの顔があった。舞子ちゃんは何か言おうとしているがちょっと困ったように歯切れが悪かい。

「うん。まあ…………その…………」

でも、すぐになっこりと笑って

「おはよう、すずか」

いつもと変わらない笑みでそういった。わたしもそれにつられて、

「あ、うん。おはよう」

つい、いつもどおりに応えてしまった。言ってからこの状況に気づいて慌ててガバツと身体を起こした。勢いよく上げたために危うく舞子ちゃんの顔面にぶつかりそうになったが今はそれ以上に気にすることがあった。

「な、なななな何で舞子ちゃんが！？それに男は！？」

「何でと言われても…………あと、男はどっかに行っちゃったよ。なにか他に大切な用事ができたんじゃないかな？」

「そんなわけ……っ！」

「それに少なくともボク達は助かったんだから。そのことが一番大事なことでしょ？」

「……………わかった、今はそれでいいよ。でも、一つだけ聞かせて」

「……………なに？」

「舞子ちゃんはわたし達と同じなの……………？」

「……………」

今日の舞子ちゃんの行為はわたしなんかよりもずっと人間離れしていた。それにところどころ夜の一族を思わせるような発言もしている。それを考えると……………

「舞子ちゃんも夜の一族なの……………？」

「……………」

わたしはさすがのように言った。自分でもそんなこと聞いちゃダメだとは分かってはいる。でも、聞かずにはいられなかった。

今までわたし達が夜の一族ということは、ずっと友達のなのはちゃんとアリサちゃんにすら隠していたのだ。友達に隠し事をしているということに心の中でずっと負い目を感じていた。でも、もし舞子ちゃんが夜の一族ならもう隠さなくてもいい。やっと気の置けない友達ができるのだ。だから、その誘惑に負けてつい聞いてしまった。そして、言ってしまうとすぐにその失言に気づいた。わたしは急いで発言を取り消そうとする。

「あ……えと、ごめん。今のは聞かなかったことに」

「……残念だけどボクはさすがの言う夜の一族ではないよ」

「っ……そう、なんだ」

だが、言い切る前に舞子ちゃんが応えてくれた。でも、その答えは私の望むようなものではなかった。やっぱりそんな都合のいいことはなかったのだ。なんで誘惑に駆られてしまったのだろう。わたしは後悔していた。けど、次の舞子ちゃんの言葉でその考えが頭から消えた。

「けど、ボクは吸血鬼ではある」

「え？」

わたしは舞子ちゃんの言っていることが分からなかった。舞子ちゃんはその私を見ると、クスリと笑って話し出した。

「すずか、吸血鬼って何だと思う？」

「それは人の血を吸う人たちのことで……」

「なら、夜の一族は？」

「え、え……？」

「わたしが言いたいのはそういうことだよ」

わたしはますます混乱した。すると、舞子ちゃんはまるで生徒に答えを教える先生のような口調で話した。ちよつと恥ずかしい。

「要するに世界には夜の一族でない、それもかなり力の強い吸血鬼もいるってことだよ」

「そ、そんな!？」

「別に不思議なことではないよ、世界は広いんだから。すずかたちが知らないことなんて山ほどある」

わたしは目を白黒する。夜の一族以外の吸血鬼がいるなんて思いもよらなかつたのだ。そして、その時ふと気付いた。

「な、なら舞子ちゃんも？」

「まあ、そつだね。吸血鬼だよ」

まるでなんでもないかのように応えた。わたしはどう反応したらいいかわからず、戸惑つたままだった。

ふと舞子ちゃんが何かに気がついたように顔を上げた。その眼はどこか遠いところを見ているようだ。しばらく何か考え事をしているようだったが、考えがまとまったのか再びこちらを見た。

「すずか、ボクちよつと野暮用ができたから行ってくるね。あ、あと恭也さんがもうすぐ来ると思つからそれまで我慢しててね」

「へ?」

「それじゃまた」

そう言うと男が出て行った窓に近づいて窓枠に足をかけた。わたしはそれを見て慌てて言う。

「ま、まって！何をするつもりなの！？」

「んー？ここから出ていくつもりだけど？」

「それなら窓から出なくても！」

「あー入口から出ると鉢合わせしそうだからね。あとなるべく早く片付けたいし」

ここから飛び降りることはなんでもないかのような口ぶりだった。でも、わたしはなるべく危険なことはしてほしくないので止めさせようとしたが、今の舞子ちゃんに言っても無駄な気がした。だからわたしは違う言葉を言った。

「ま、舞子ちゃん！」

「うん？」

「わたし達友達だよね？わたし、はやてちゃんはもちろんだけど舞子ちゃんとも友達だと思っているから！だからっ」

言葉が出てこない。言いたいことはたくさんあるのにこんな時だけ出てこない自分が恨めしい。

舞子ちゃんはわたしの言葉にびっくりした顔をしていたが、すぐに柔らかな笑みを浮かべた。

「ボクもだよ。それに、さっきはあんなこと言っただけどずすかは初めての友達だから。だから、ここまで来たんだよ。」

「
」

わたしはそのセリフに顔が赤くなるのを感じた。そして、それを隠そうと慌てて下を向く。

「あ、そうだ今晚そちらに行きますって家族の人に言っといてね。」

その言葉にハツとし、すぐさま舞子ちゃんの方を向いたがすでに誰の姿形もなかった。

恭也さんが助けに来てくれたのはその数秒後のことだった。

> side 男<

クソツ！クソツ！何でこんなことになった！すべてうまくいくはずだったのに！それがなぜこんなみつともなく逃げ出す羽目になった！？

「それもこれもあの餓鬼のせいだ！」

そつだ、あの餓鬼のせいだつ！

「殺してやる。次は絶対に殺してやるぞ！」

「否、貴様に次はない」

背後から聞こえた声に慌てて後ろを向くとそこには

大きな口があつた

そして、それが男の見た最後の光景だつた。

> side 舞子<

「いくら私の世界の吸血鬼とは比べ物にならないとはいえ腐つても吸血鬼。人間よりもずっと上質だ」

私の前には男の下半身だけが落ちてゐる。だが、それも徐々に暗い闇に沈んでいく。やがて男の肉体は消えて飛び散つた血だけが痕跡として残つた。

腕を出すとそこに一匹の黒いカラスがとまつた。するとカラスの姿

が崩れ、混沌の一部として私に同化した。

「ふーん、そこがすずかの家か。夜の一族なんていう大層な名前がついているくらいだからかなり大きな家だと思ったけど予想通りだでも、中にいる人は随分と少ないね。お姉さんらしき人とメイドが二人、あとは恭也さんか。他に人はいないようだね。やつぱりこの世界でもそういう力をもつ家計は長生きできないのかな。」

私が今見ているのはすずか達のあとを追わせたカラスの視界だ。あれからすぐに恭也さんが来てすずかを車で家まで運んで行ったのだ。ちなみに、恭也さんの姿はこのビルに入る前からすでにケモノ達が見つけていた。だから、タイミング良くすずかの前から消えることができたのだ。

「そろそろ私も向かった方がいいかな。あまり遅くなると失礼だしね。」

どうやらすずかはもう眠ったようだ。まあ、こんなことが起きて疲れていたんだろう。どうやら私の伝言は伝えたらしくお姉さんと恭也さん、そしてメイドの一人が同じ部屋でじっとしている。

「さて、はたしてこの会合は吉と出るか凶と出るか」

私は一度、猛禽類のように笑うとその場から消え去った。

その場には血と夜の闇だけが残っていた。

二十二話 会合（前書き）

遅れてすみません……

でも、夏休みに入ったので次は今月中にできそうです。そして、次が一章のラストになりそうです。

二十二話 会合

> side 忍く

カチ カチ カチ

部屋にはまるで人がいないかのように時計の音だけが響いている。

カチ カチ カチ

恭也が向かってからどれくらいの時が過ぎただろう。もう数時間はたったように感じるが、実際はせいぜい10分程度だろう。

カチ カチ カチ

そして、そろそろ30分は経とうかというほどになってようやく恭也からの連絡がきた。

『……………もしもし忍か?』

「恭也! すすかは無事!?!」

『ああ無事だよ。今変わる……………お姉ちゃん?』

「すすか! 良かった。無事だったのね……………」

『うん。舞子ちゃんに助けてもらったんだ』

「え、舞子ちゃん?」

私は困惑する。その名前は間違ってもこんなところで聞くような名前ではない。ならなぜ……？そのまま思考の渦の中に入り込んでいたが、

『……？お姉ちゃん？』

すずかの声でハッとする。

「ああ、ごめんなさい。ちょっと考え事をしてて」

『……うん。あ、それでね、舞子ちゃんが』

「はいはいそこまで。今はとりあえず帰ってきなさい。話はそれからたっぷり聞いてあげるから。あ、恭也にちょっとかわってくれかしら」

『うん、わかった。………かわったぞ』

「今の状況はどうなっているの？」

『周囲に気配はない。おそらくはもう大丈夫だろう。』

「そっ………」

私はホッと息をついた。

「なら悪いのだけどすぐに帰ってきてもらえるかしら。状況の整理がしたいの。それにすずかの顔も見たいし」

『ああ、なるべく急ぐよ』

そう言つと恭也は何か考えるように口ごもった。

「何か気になることでもあるの?」

『……すずかちゃんが舞子ちゃんが助けしてくれたと言っていただろ
うっ』

「……ええ」

『おそらく俺はその子を見たことがある』

「そつなの!??」

まさか、恭也がすずかの友達と知り合いだとは夢にも思わなかった。

『ああ、翠屋でな。見た目はなのは達より2、3歳年上のようにだつ
た』

「……何かおかしな点があるの?」

『……俺がこのビルで見た人の数は四人だけだ。それもかなりの
重傷を負っている』

「っ!?!?」

『そして、ビルの中のいたるところで血痕があった。だが、そこには
死体が全く残されていない。』

「……つまりその舞子ちゃんは何かしらの力を持っていると」

『その可能性が高い。探る時は用心しろよ』

「ええ、分かった。肝に銘じるわ。詳細は帰ってからにしましょう。気をつけてね」

『ああ』

そう言うと電話が切れた。

私はさすがが無事だったことに安どしながらも、新たな厄介事に頭を痛めた。

「はあ、この件の後始末もあるってのに……」

深いため息をつく。しかし、すぐに頭を切り替える。

「とりあえずは後始末からかしら。ノエル、すぐに人を手配しておきなさい。ファリンはすずかを迎える準備を」

「かしこまりました」

「は、はいっ！」

後ろに控えていた二人はすぐに退出しようとする。

「ああ、待って。ノエル」

「はい」

私はノエルを呼びとめる。そして顔を近づけて、

「手配が終わってからでいいから山瀬舞子っていうこのことを調べてきて。何らかの能力を持っている可能性が高いわ」

その言葉にノエルは驚いた表情をつくった。

「なるべく慎重に頼むわ」

ノエルは重々しく頭を下げ、すぐに部屋から出て行った。

私はこれからどうなるのかを考え、暗澹たる気分になった。

「ふう……ノエル、すずかはまだ寝た？」

「はい。さすがに疲れたのでしよう。すぐにお休みになりました。

一応ファリンもそばにつけておきました」

「そう……それにしても、」

吸血鬼か……

「恭也はどう思う？」

私は隣に座っている恭也に聞いてみた。

「……俺も一回しか会っていないからな、彼女がそうであるのかは

分からない。だが……」

恭也はあまり思い出したくないといったように言った。

「少なくとも廃ビルの惨状を見るに何らかの特別な力があるのは確かだろう」

「……くわしく聞いてなかったけどそんなに？」

「ああ、生存者は4人、それも重体だ。その上、廊下には十数人分以上の血が飛び散っていた。なのに死体はかけらさえない。さすがに異常すぎる」

「……… いったい彼女の目的はなんだ。わざわざすずかを助けたのは何のためだ。」

「……… だめだ、情報が少なすぎる。」

「ノエル、彼女の情報はもう集まった？」

さすがに早急すぎるかと思ったが今は少しでも情報がほしい。

「それが………」

珍しくノエルが口ごもった。

「どうしたの？」

「集まったというか……… 集まらなかったというか………」

「どうかしたのか？」

ノエルの様子に恭也までも不審に思い、尋ねてきた。

「……一ヶ月前に病院に運ばれて以来、八神はやとと一緒に暮らしている。これが彼女の情報の全てです。それ以前のことは何も……」

「「え？」」

その言葉に私たち二人とも間抜けな声を上げた。

「裏にも表にもこれ以上の情報は、戸籍すらありませんでした」

「……」

さすがに絶句してしまった。

何だそれは。それではまるで……

「一か月前に生まれたみたいだな……」

恭也も同じ考えなのか私が考えていることと同じことを呟いた。

それからしばらく沈黙が続いたが、ふとあることを思い出した。

「そついえば……すずかが『舞子ちゃんが今晚そちらに行きますって言ってたよ』って言ってたわね」

そう呟いた時だった。

バン！

その音とともにいきなり窓が開いた。

私たちはとっさに立ちあがった。私をかばうようにノエルが前に出て、さらに恭也がその前に立つ。そして緊張の中、窓から出てきたのは……

「猫？」

全身真っ黒な猫だった。

その猫はそのまま部屋の中に入って来ると私たちの眼の前まで歩いてきた。私たちは気を緩めずにその猫を注視するが一定の距離まで来ると歩みを止め、丸くなってしまった。そのこちらの様子なんて気にも留めたくない行動に私は少し緊張を緩めた。

「ノエル、念のため聞くけど家の子じゃないわよね？」

「はい」

なら向こうがよこしたと考えるのが普通だが、いったい何のために

……

そう思っているとハツとしたように恭也が窓の方を向いた。そして、それと全く同じタイミングで声が聞こえてきた。

「こんな夜分に失礼します」

その声が聞こえてようやく私も窓の方を向いた。そしてそこには……

「ですが、こういふことはなるべく早くしたほうがいいと思い時間をいただきました」

すずかより1、2歳年上の女の子がいた。

「恭也さんと会うのはこれで二回目ですね。前のときはこんな風に再開するとは思いませんでしたが」

「ああ、俺の方も思ってもみなかったよ」

「それではお互いさまということですね。そちらのすずかのお姉さんと会うのは初めてですね。私の名前は山瀬舞子と申します」

「……月村忍よ」

「では、忍さんこれからよろしくお願いします」

「……それはそっち次第ね」

「別にそんな警戒しないでも大丈夫ですよ……といっても無理でしょうね。ちなみにそっちのメイドさんは」

「……」

「彼女はノエルよ」

「そうですね」

とりあえず言いたいことは終わったのか、話を止めていつの間にか足元に寄っていた猫を肩に乗せた。
なので、今度はこちらから話しかける。

「今晚の用事は何かしら」

「まあ、簡単に言うと今日のことですね。それとお互いの情報交換とかですね。とりあえずここで争うつもりはないのでお互い座りませんか？」

私は恭也に視線を向けると、うなずいたのでノエルに目配せをする。ノエルは心得たように新たに椅子を一つ私たちの正面に持ってくる。

「こちらへどうぞ」

ノエルの言葉に舞子さんは従い、椅子に座る。それを見て私も椅子に座るが、恭也は立ったままである。彼女は恭也に目を向けたが何も言わずに私の方を向く。

それを確認すると私から話を切り出した。

「今日のことだけどすずかを助けてくれて本当にありがとうございます。このことは感謝してもきれないぐらいです」

「別に気にしなくてもかまわないですよ。私が助けなくてもどうせ

そちらで解決したでしょうし。まあ、お礼の言葉はもらっておきます」

「そう……あなたがなくなった後のことだけど聞く？」

「んー、どういふことになったのかは一応聞いておきます」

「わかったわ。まず首謀者の」

私は首謀者の顛末、残っていた者の処分、これからの予想などをしゃべれる範囲で話した。

「ふーん、あの男行方不明なんだ」

「ええ、けどいずれ発見できるでしょう。心配はいらないわ」

「それについてはそちらにお任せします。あと、すずかの様子はどうでしたか？」

「さすがに疲れていたのしょうね、ぐっすり眠っているわ。でもあなたのことはかなり熱っぽく話してくれたけどね。まるでヒーローのようにね」

「うーん、そう言われると照れますね。そもそもそんな良い者じゃないですし」

その言葉に若干眼を鋭くする。

「……ならどういふ者が聞いていいかしら？」

「うん？……すずかから聞かされているものだと思っていましたが？」

舞子さんも今までの、どこか人を食ったような態度を真剣なものに変えた。

「少しだけね。けれど推測の域を出ないわ。だからあなたの口から聞きたいの」

「ふむ……」

彼女は少しばかり考えるそぶりを見せる。私はその間にノエルが用意してくれた紅茶に口をつける。いつの間にかのどが完全に乾いていた。

私がかップを机に置くのを見計らって彼女が応えを返してくる。

「簡単に言うと吸血鬼ですよ」

「っ！」

予想はしていたとはいえその返答に身体が強張る。隣の恭也や後ろに控えているノエルからも同じような緊張が伝わってきた。そんな私たちの様子を見て舞子さんは苦笑した。

「さっきも言いましたけど敵対するつもりはないのでそんなに緊張しないでいいですよ」

そう言われてすぐにリラックスできる人はいないだろう。彼女は変わらない私たちの様子を見てもう一度苦笑すると急に真剣な表情になる。

「ところで……私からも聞きたいことがあるんですが」

「……聞きたいこと？」

「ええ……夜の一族　　そのことについて聞きたいんですよ」

「え？」

私たちは疑問の声を上げる。舞子さんは自身を吸血鬼と言った。それならなぜ今更夜の一族のことを聞くのだろうか？

……いや、待て。彼女は自分のことを夜の一族と言っただろうか。思い返してみると吸血鬼と言ったが一度も夜の一族とは言っていない。

「まさか……」

そんな声が私の口から思わず飛び出たのも仕方のないことだろう。彼女はそんな私の様子にニヤリと笑い、

「私の吸血鬼としての正式名は

『死徒二十七祖』の第十位ネロ・カオス

千年の時を生きる混沌なり」

そう言った。

二十二話 会合（後書き）

アニメとwikiの知識しかないので恭也と忍の口調が……
原作と違ってたら、ここではこういった口調というところで……
それにぶっちゃけこれ以降出番がn(r)y

最終話 平穏な未来へ（前書き）

これで1章が終了です。次回からは閑話を挟んでようやく無印に入ります。なるべく原作にそいたいとっては考えていますがどうなるかは未定です。あとアニメ準拠です。

最終話 平穏な未来へ

> side 忍 <

「私の吸血鬼としての正式名は

『死徒二十七祖』の第十位ネロ・カオス

千年の時を生きる混沌なり」

私たちは完全にのまれていた。死徒二十七祖という言葉なんて聞いたこともないし、それがどんな意味を持つのかは分からないが彼女はそういうものなんだと理解させられた。彼女は夜の一族なんて遠く及ばない存在だと分からせられた。

「ま、ボク自身は20年程度しか生きてないんだけどね」

「……………は？」

私たちは彼女の雰囲気のアマリの変わりように目が点になった。

「それに『死徒二十七祖』っていつでもここじゃ全く意味のない名前だし。だからあなた達より数段上の存在ということだけ分かっただけ問題ないよ」

「……………それが問題だと思っただけだね」

はあ。

私は深いため息をつく。彼女はニコニコしながらそんな私を見てい

た。私はいろんな要因で頭が痛くなりながら再び聞いた。

「つまりあなたは夜の一族ではない吸血鬼で、同じ吸血鬼である私たちのことを知りたいと？」

「うん、そういうこと」

舞子さんはあっけらかんと言った。

さて、どうしたものか。彼女に敵意はないようではある。でもだからと言って同じ吸血鬼というだけで私たちのことを教えるわけにはいかない。

「一応言っておくけど」

迷っていると彼女が口を挟んできた。

「私はあなたの問いに答えた。ならば今度はあなたが答えるのが礼儀では？」

これは痛いところを突かれた。確かに私が答える番なのだがやはり言ってもいいのかという不安がある。しかし、それで敵対してしまつては元も子もない。

それからしばらくの間悩んでいたがついに決断した。

「わかったわ。夜の一族のことを話しましょう」

私は話すことに決めた。やはりここで関係をこじらせたくはない。それに、舞子さんも言ってしまうえば裏側で生きているのだから口を

滑らすこともないだろう。

「けれど単純なことだけよ。さすがに詳しくは話すつもりはないわ」

「かまわないよ。わたしもそうだしね。私はこういった交渉では等価交換が望ましいと考えているから」

「ならいいわ。」

私たち夜の一族は異常な跳躍力や、鋭い聴覚視覚、並はずれた再生回復能力などの高性能な肉体を持って生まれてくるの。でも体内で生成される栄養価、とくに鉄分のバランスが悪いため、完全栄養食である血を飲むの。それが吸血鬼と言われているゆえんね。遺伝子障害の定着種というのが定説になっているわ。だからあなたと違って古いもするし寿命も人と変わらないわ」

「……なにそれ。もうほとんど人と変わらないじゃないか」

「あなたにとっては人間と同じでも人から見れば夜の一族も吸血鬼よ」

「……まあ、それもしかたないか。でも、血は飲むんだよね？」

「ええ、まあね」

「それなら輸血パックも当然あるよね？」

「あるけど……分けてほしいの？いいわよ、さすがのこともあるし」

「お願いできるかな？ここ一ヶ月血を飲んでなかったから喉が渴いていたんだ」

「……………それであの惨状か」

ここで今まで黙っていた恭也が初めて口を開いた。

「あーひよつとしてビルの中のこと？確かに自分も今思い返すとちよつとやり過ぎたと思ってるんだ」

「ちよつとどころではない。さすがにあれはな……………」

「あー、うん……………」

舞子さんはばつの悪そうな顔をする。どうやら自分でもやり過ぎたと思っているようだ。ちよつと何とも言えない雰囲気が出る。そこで空気を変えるために私から話を切り出す。

「まあ、そんなことが起きないように輸血パックを定期的に分けるといふことでいいかしら」

「あ、待って。どれくらいの量をそっちは飲んでるの？」

「週に一パック程度ね」

「……………え？」

舞子さんがその一言で固まった。だが、すぐに再起動し慌てて話を出す。

「そ、そんなんじゃないよー！」

「でも一ヶ月我慢できたんでしょ？」

「どっちにしろ必要量に全然届いてないんだから大して変わらない
」！」

「えーと、どれくらいの量が必要なのかしら？」

「週に3キロリットルぐらい？」

「「ぶっ!?!」」

私と恭也はふき出した。あまりにも桁が違いすぎるのだ。さすがに
そんな量を用意することはできない。

「まあ、さすがに無理だと思っから一日に3リットルでいいよ」

「まあ、それぐらいなら……」

そう言いつつノエルをちらりと見る。ノエルは僅かに顔をしかめて
いたがうなずいた。

「……問題ないようなのでこれでいきましょう」

「うん、お願いするね。あ、血液はなるべく新鮮なものをよろしく。
受け取り方法は……」

そういつと舞子さんは初めの猫を差し出してきた。

「この子にのませて」

「え？」

「この子は私の使い魔？みたいなものだよ。この子が飲んだ血はきちんと私に供給されるから心配しないで」

「へー、そんなに使い魔って便利なの」

「ボクだけだよ」

私は猫をじつと見つめる。その子は舞子さんが差し出したときからじつとこっちにその赤い瞳を向けていた。そのまま見つめ合っているとつい声が漏れた。

「……かわいい」

「え？」

「あ、ご、ごほん。とりあえず了解したわ。この子に血を飲ませればいいのね。それとこの子に名前とかあるの？」

「特につけてないね」

「そう。なら家で生活する以上、名前が必要だから今決めときたいのだけど……何かいい名前ある？」

「うーん……」

舞子さんは猫を見ながら少し考えると

「ネラでいいんじゃない？」

「…さすがに安直過ぎると思うけど……ま、いいんじゃないかしら」

「じゃ、そういってことで。これからよろしくお願いします、忍さん」

「こつちも今回の件はありがとう。あと、すずかがいないときは忍でいいわ。それに口調もいつも通りで構わないわ」

「そう？ならボクのことも舞子でいいよ」

そう言い私たちは握手した。

「そう言えば戸籍の方はどうするの？なかったけど……」

「あ……」

「…わすれてたのね。……はあ、それもこつちで作っておくわ。ちなみにサービスよ」

「ありがとうー」

深夜の会談の後、忍の好意で泊らせてもらえた。ボクは吸血鬼ではあるがさすがに今夜はいろいろなことが起こり、精神的に疲労していたのでぐっすりと眠った。とは言え常にケモノ達の眼があるので何が起ころうとすぐに対応できるのだが。まあ、何が言いたいのかというと

「……」（じー）

すずかがさつきからボクの顔をじつと見ていてすごい起き辛いのだ。

ことの始まりは　　と言っても三十分前のことだが　　すずかがボクが泊っている部屋に来た時だ。おそらく起こしに来たのだと思うが、ボクの顔を覗き込むとそのままじーっと見つめ出したのだ。そしてその状態がかれこれ三十分も続いているのだ。すずかはボクに『見られて』いることは分かっているが、こっちは否応にも見続けているためいい加減恥ずかしくなってくる。このこう着した状態を打破したのは一人のメイドさんだった。

「すずかちゃん、どうしたのですかー？」

その言葉にすずかはびくつと飛び上がり後ろに下がった。それはもう残像ができるほどのスピードだった。

「？何かあったのですか？」

「な、何でもなしよ。舞子ちゃんがなかなか起きなくて」

「あー、昨日は遅くまで忍様と話していたようですからねー」

「…そうなの？なら寝かしたままの方が……」

「でも、忍様が起こすようおっしゃっていましたのです。だから起こすのですよー」

そう言つとゆさゆさと身体を揺さぶつてきたのでこれ幸いと起きる。

「う…ん」

「起きました？」

「まあ、なんとか。えっと……」

「ファリンです」

「ファリンさんありがとう」

「お礼はすずかちゃんに言ってください。三十分以上前から起こしていたのです」

「あー、それは悪いことをしたね。昨日は遅くまで起きていてね。ありがとうすずか」

「あ、いえ、そんな」

すずかはばつの悪さからか何とも言えない表情をする。ボクはそれに気づかないふりをして話を進める。

「それでどうかしたの？」

「忍様がよんでいたんです」

「ふーん。ならいそがないとね。案内してくれる？」

「はいです」

「すぐか行くよ」

「う、うん」

ボクたちはファリンの後をついていくとほどなくして大きな扉が見えてきた。ファリンが失礼しますと言いながら扉をあける。中にはすでに三人ともそろっていた。

「舞子ちゃんとすずかちゃんを連れてきました」

「そうお疲れ様。すずか、ずいぶんとかかったのね。舞子さん、おはよう。昨日は遅くまでつき合わせてごめんなさいね」

「いえいえ、こちらこそ昨日はありがとうございます」

ボク達の言葉ですずかも慌ててお礼を言う。

「あ、あの、昨日は本当にありがとう。舞子ちゃんのおかげでわたし……」

「いいよ、もうお礼は昨日言ってもらったし。それにはやてのお友達になってくれた件はこっちがお礼を言わないといけないしね。お互いさまということでのこのことについてはもうお礼はなしね」

「う、うん！」

すずかは少し驚いていたがうれしそうにうなずいた。そんなすずかを見て忍さんも一瞬微笑えんだが、すぐに真面目な表情をしてすずかに話しかけた。

「すずか、あなたにも言っておきたいことがあるの」

「え？」

そういつてすずかに昨日話したことを所々飛ばしながら伝える。すずかはその話にも、とくにボクの正体のところで驚いたりしながら聞いていた。

話が終わるとすずかは夢物語を聞いたような様子だった。まあ、いきなりあんなことを言われても信じられないよね。

「別にすぐに信じるといってもいいよ。あまり関係のないことだしね。でも、ボクの危険性については知っていてほしい。いざというときのためにね」

「そんなときが来ないことを祈っているわ……そんなことは置いといてすずか、新しい子が増えたわよ。」

そういつて忍さんは昨日ボクが渡したネラを見せる。

「この子の名前はネラって言うのよ。舞子ちゃんがくれたの」

「わー！」

すずかは喜んでネラを抱く。ネラはくすぐったそうにニャーと鳴く。

「かわいい……ありがとう舞子ちゃん！」

「どういたしまして。気に入ってもらえるところれいよ」

すずかはネラの様子を見て、ボク達はすずかの様子を見て和んだりしながら午前中を過ごした。

お昼を過ぎところでそろそろ家に帰るとすずか達に伝える。すずかは残念そうな顔をしたが今度ははやてと一緒に来るといとうれしそうにほほ笑んだ。忍さんが送ってくれるというので言葉に甘えて家まで車で送ってもらった。ついでに恭也さんも送るつもりなのか車にはボクとすずか、恭也さん、忍さんの4人が乗る。道中でいろんな話をしていたらいつの間にかボクの家に着いた。

「送ってもらってありがとうございます」

「いいのよこれくらい。恭也を送るついでだしね」

「舞子ちゃんまたね」

「またねすずか」

そう言つとすずか達の車は発信した。

ボクは車が見えなくなるまで見送ると一日ぶりに我が家に入る。まるで何年かぶりに帰ってきたようで感慨深くなる。

「……さて、はやてを迎える準備をしますか」

それからしばらくすると玄関にはやてと石田先生の姿が見えた。ほどなくして、

「ただいまー」

はやての声がする。

「おかえりー」

ボクはそれにいつものように答えて、玄関へ向かう。ボクの姿を確認するとはやてはうれしそうな顔をした。

「お姉ちゃん！」

「はやて！久しぶり」

「久しぶりゆうても一日もたつとらんがな。でも…久しぶりや！」

どうやらお互い一日離れただけで寂しくなったらしい。ボクははやてと顔を見合わせると一緒のタイミングで笑った。

「石田先生も無理を聞いていただいてありがとうございます」

「いいのよ。子供は大人を頼るものなんだから。でも、次ははやてちゃんも連れて行ってあげてね。ずっと寂しがってたんだから。」

「せ、先生！」

はやてが慌てて先生に向かって叫ぶが、しっかりボクの耳に届いた。そのことにうれいような恥ずかしいような感じがする。

「はい、そのつもりです。はやて、すずかが今度ははやても一緒におとまりしようって」

「ほんま！？って、すずかちゃんの家泊ったんかいな。ん？すずか？」

「ああ、昨日の夜で仲良くなってね」

「……ふーん」

はやては少し機嫌が悪そうに言った。ボクは分かりやすいなと苦笑しながら言う。

「大丈夫。ボクの一番ははやてだから」

「べ、別にそんなん気にしてないわ！」

そう怒ってきたが、照れ隠しなのはばればれだった。

ボクは今だけはこの身体のことと結界のことと忘れてずっとこんな日常が続いてほしいと思った。それが決してかなわないものだとかかっていても、いずれ崩れるものだとしてもそう願わずにはいられなかった。

最終話 平穏な未来へ（後書き）

シンデレレはいいものです。

一話 デバイス（前書き）

これから2章となります。

2章は無印まで進みます。

これからようやく魔法少女っぽいことをしていきますよ〜

一話 デバイス

> side 舞子 <

それはある月の良く見える夜のことだった。

町中にいるケモノ達の中の一匹が何かよくわからないものを見つけたのだ。それは魔力のようなものを発している、十字架の形をしたペンダントである。ケモノはそこで待機させ、ボク自ら向かうことにした。

「魔力ねえ……元の世界の物がまた落ちてきたのかね？」

ボクははやてが寝ていることを確認するとすぐに転移した。

ケモノがいる場所は町外れにある埋め立て地であたりには何もなく静かな場所である。そして、その中心に目的の物はあった。

「ふーん、あれがそうか。確かに微弱ながら魔力を発しているね」

一般人ならそれを決して注目することはないだろう。だが、魔術師にとってはこんな魔力の感じない場所で一つだけ微弱とはいえ、魔力を発しているのだから目立つことこの上ない。ボクは様子を見るために慎重に近づくことにする。そして、手の届くところまで近づくとその形がはっきりとわかってきた。

十字の中央に円形の赤い宝石のようなものが埋め込まれており、二匹の蛇が螺旋を描くように絡まっている。

「……円と十字に蛇か……」

何とも奇妙な組み合わせだ。太陽のシンボルである円と十字に大地母神の象徴である蛇。天と地の象徴をもつペンダント。しかも、魔力を帯びているとすれば

「魔道具しかないね……」

ボクはふうとため息をついた。まためんどくさいことになるなあ、
と思いながらペンダントを手に取ろうとする。この時、厄介なもの
とは思っていても大して危険意識がなかったのは自身がほぼ不死身
であることと大した魔力を放っていなかったからである。もし、何
か起こっても自分で処理できると考えたからである。確かにそれは
間違っていないかった。だが厄介事が想像以上異常のレベルであり、
これが今後の運命を左右するものであるとはこの時は考えもしてい
なかった。

注意しながらペンダントを手にした瞬間異変が起こった。

『 プログラム起動』

「っ!？」

いきなりペンダントが光を放つ。ボクはとっさに放り投げた。だが、
その間にもそれはことばを綴る。

『設定の初期化

完了

マスター認証

完了

これより通常状態へと移行します。』

そう言い終わると光が収まった。ボクはそれを緊張のまなざしで見
ていたが次に放たれた言葉で一気に崩れた。

『し、死ぬかと思いました』

「……………は？」

『あなたは命の恩人です！このままではいずれ土に埋められるところ
でした！お礼と言ってはなんです！魔法を教えてください！これで
あなたも魔導師の仲間入りです！エリートですよ！』

……………えーと、どう反応すればいいのだろうか？なんとなくだがこれ
を作った人はボクの世界の者ではない気がする。こんなふうにしや
べる魔道具を作る変人はボクの世界にはいないと思う、思いたい。

『あれ？どうしました？……………はっ！？もしやわたしの言うことを疑
っていますね？いいでしょう。そうまで言うなら証拠を見せてあげ
m「あーちよつと待って」はい？』

ボクは若干の頭痛をこらえながら話を遮った。このまましゃべらせ
ておくとどんどんおかしな方向へ行きそうであったからである。

「えーと、まずあなた何？」

『わたしですか？わたしはインテリジェントデバイスです』

「……そのインなんかって何？」

『あれ？デバイスを知らないんですか？まあ、それはともかく……コホン。インテリジェントデバイスとはAIを搭載することによって意思を持ったデバイスです。ちなみにデバイスというのは魔導師が魔法の使用の補助として用いる機械のことです』

「……で、そのインテリジェントデバイスがどうしてこんなところに？」

『そうなんです！！聞いてくださいよ！！それは今から10年ほど前のことで』

「……簡潔にお願い」

『次元震に巻き込まれて3か月ほど前にここに落ちてきました』

「次元震ってのは？」

『次元世界レベルでの地震のことです』

「異世界の存在が確認されているの！？」

ボクは思わず大きな声をあげてしまった。もしそれが本当なら元の世界に帰ることができるかもしれないのだ。

『ええそうですが……どうしたのです？』

ボクは事情を話してもいいか少し考えたがもしものときは壊せばい

いと結論付け、こことは異なる世界から飛ばされて来たことだけを話した。

『次元漂流者でしたか』

「たぶんそれだね。で、元の世界に戻る方法はあるの?」

『ふふん簡単です!魔法を使えるようになればいいのです』

「そんな無茶な……」

『大丈夫ですよ!わたしが一から教えてあげますから!あつという間に一流の魔導師になれます!』

ここでちよつとした違和感に気がついた。

「“魔法”ってそんなに簡単に覚えられるの?」

『素質のある人なら割と簡単に使えるようになりますよ。さすがに次元転送となると簡単には言いませんがそれでも難しい部類ではありません』

「……」

絶句してしまう。魔法がこんな簡単にできると言われるとは思っていなかったのだ。しかも、大勢の人ができるとききた。もとの世界とは比べ物にならないほどの魔術の発展だ。

一瞬シヨックのあまり意識がとびかけたが、気を取り直して魔法についていろいろ聞いてみる。

『魔法とはですね管理局管理下世界のほとんどに存在する魔力素を特定の技法で操作し、作用を発生させる技術体系のことです。この作用を望む効果が得られるよう調節し、または組み合わせた内容をプログラムと言い、用意されたプログラムは詠唱・集中などのトリガーにより起動されます。』

つまり、自然摂理や物理作用をプログラム化し、それを任意に書き換え、書き加えたり消去したりすることで、作用に変える技法が魔法であり、それを補助するのがデバイスである私の役目なのです。』

「へー……」

聞く限りではどうやらこの世界で言う魔法とは魔術と科学の融合による超科学と言えるだろう。だが、どちらにせよ今の私に必要な物には違いない。ここは、さらに詳しいことを聞くためにとりあえずボク達の家に持って帰ることにする。

「なるほど……もっと詳しいことを聞きたいからボクの家に移動していい？」

『それは構いませんが……どうやって移動するのですか？ここから歩いて行けるほど近いとか？』

「ま、それはちょっとした裏技だよ。ひとまず……」

ボクはペンダントを持ち、少し黙るよう言うと家に転移した。工房に転移したのを確認し、ペンダントもちゃんとあることを確認しておく。

「さて、それじゃあさっきの続きをしようか」

『…………』

「ん？どうかした？」

『な…………』

「な？」

『何ですか今のは……！……！』

「うわっ！？」

いきなり大声に思わずペンダントを落としてしまいそうになるが寸前で出てきたケモノが受け止めた。しかし、そんなことに気を向けることもなくさらに声を上げた。

『何ですか今のは！？魔法も使わずに転移しましたよ！？』

「あーそれはボクの特徴」

『特性！？』

「そう。こことは全く異なる“世界”に接続してそこからケモノ達を呼び出したり好きな場所に転移したり。それがボクの持つ異能だよ」

『そ、そんなことが…………』

ボクの言ったことにショックを受けているようだったが、こっちも

立ち直るのを待つほど時間に余裕があるわけではないので話を進めることにする。

「まあボクのことに関してはあとで話してあげるから、今はそっちの魔法について教えてよ」

『……いいでしょう、今は置いとく事にします。でも、魔法についてはさっき話したことですべてですよ。後は魔法の種類とかになります』

「それについても聞きたいけどさっき管理局管理下世界って言うたよね。それについて説明して」

『分かりました。まずこの世界にはですね、ミッドチルダという世界が中心となって設立した数多に存在する次元世界を管理・維持する時空管理局と言うものがあります。管理局とはそれを指します。そして、次元を渡る能力を持つ世界を「管理下世界」と呼び、もない世界を「管理外世界」とよびます』

「時空管理局ねえ……その組織は具体的に言うとなんか何をするところなの？」

『そうですね……主に法を犯した者を逮捕して裁くということですかね。他には文化管理や災害の防止・救助もおもな任務です』

「なるほど……協会のようなものか。なら、こんなに簡単にボクに魔法を教えるのも大丈夫なの？捕まったりしない？」

『まあ、私と契約した以上持ち主に魔法を教えること自体は何にも問題はありません。しいて言えば管理局の魔導師にばれたら怒られ

るかもしれないってことぐらいですね』

「全然良くないんじゃない……まって。今契約したっていったよねということ。ボクそんな覚えはないんだけど」

『あー……それは最初に手にしたとき自動で契約をしたんです。と言ってもあなたに最適化しただけですが。これで私はあなた専用のデバイスになりました』

「何でそんなことを……」

『……実は私、結構特異なデバイスなんです。そのため私にあった人がこれまで見つからず、ついには廃棄処分になったんですけど……それが何の運命のいたずらかこの世界に流れついてしまったんです。でもこの世界には魔導師はいないようですよ、もうこれまでと違ってすべてのプログラムを封印したんです。ところが……』

その後によく言葉はデバイスにもし顔があつたら満面の笑みだろうと思わせるような喜色に満ちた声だった。

『ついに、ついにあなたを見つけたんです！！初めてでした、私にここまで合う人は。ですからつい私の独断であなたをマスターに認証してしまつたんです……あのっ！迷惑はかけませんからどうか私をもらつてはくれませんか！？』

その声には少しの期待と大きな不安の色が見て取れた。ボクはガリガリと頭をかくと言った。

「いや、初めから捨てるつもりなんてないよ。あなたは僕にとってプラスになることはあってもマイナスになる要素は今のところ一つ

もないんだから

『な、なら!』

「それに、いざというときは捨てるなんて甘い真似はせずに粉々に壊すから」

『ひっっ!』

「まあ、それは置いて」

『冗談ですよ? 冗談ですよっ!?!』

「半分くらいは」

『じゃあ残りの半分は!?!』

その後もギャアギャアと話していたが自分がかかわれていることに気付いたのかよじやく落ち着いてきた。

『ぶっ…ぶっ……で、あの、結局のところ……』

「ん? もうすでにボクのものなんでしょ? ならありがたく使わせてもらっよ」

『は、はい! これからよろしくお願いします! えーと……』

「ああそついえば名前言ってなかったね。ボクの名前は山瀬舞子、よろしく。あなたは?」

『あの、私には識別番号しかないんです……だから舞子ちゃんに私の名前を決めてほしいんです』

「名前か……うーん」

ボクはジッとデバイスを見る。二匹の蛇が十字に巻きついている。そこから連想されるものは……
そう考えるとすぐに思い浮かぶ名前があった。

「カドウケウス……カドウケウスはどうか？」

『カドウケウス……いい響きです。気に入りました！これから私の名前はカドウケウスです！』

これがボクがこの世界で相棒と呼べるものに初めてであった瞬間であった。

一話 デバイス（後書き）

次の話でもう一つやりたいことをやって、その次から本格的に無印が始まります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2794i/>

魔法少女リリカルなのは 混沌の獣

2011年10月1日23時45分発行